

学 会

第 41 回北陸医学会総会

日 時：昭和 62 年 9 月 6 日（日）9 時 30 分

場 所：富山医科薬科大学
富 山 県 民 会 館
高 志 会 館
富山歯科総合センター

シンポジウム「アレルギーの基礎と臨床」

司会 矢野 三郎（富山医科薬科大学内科）

岡田敏夫（富山医科薬科大学小児科）

1. I 型および III 型アレルギー反応における組織障害
小泉富美朝，北沢幹男

（富山医科薬科大学病理学教室）

2. 環境とアレルギー とくに花粉アレルギー症につ
いて

加須屋実，寺西秀豊

（富山医科薬科大学公衆衛生学教室）

3. ユスリカアレルギー

a) 小児喘息

村上巧哲，五十嵐隆夫

（富山医科薬科大学小児科）

b) 鼻アレルギー 特別発言

大橋直樹，佐々 学

（富山医科薬科大学耳鼻咽喉科）

4. アレルギー性接触性皮膚炎

諸橋正昭（富山医科薬科大学皮膚科）

5. 難治性気管支喘息

山下直宏，星野 清（富山医科薬科大学内科）

6. 薬剤性肝障害

井上恭一，樋口清博（富山医科薬科大学内科）

第 1 会場

内 科 分 科 会

第 2 会場

第 136 回 日本内科学会北陸地方会

A 会場

座長 泉 三郎（富山県立中央病院内科）

A 1. ネオパラゾール中毒の 1 例

○武田三昭，北 義人，須藤治郎

上田幸生，亀田正二，能登 稔

（市立小松総合病院内科）

A 2. Diphenylhydantoin 投与によって多彩な副作
用を示した 1 例

○大江 浩，梅沢良昭，根井仁一

（城端厚生病院内科）

A 3. 大量のアトロピン静注にて救命し得た激症有機
リン中毒の 1 例

○岩崎博道，石坂為久，月江富男

本村俊二，林 一彦（林病院）

李 鐘大，中村 徹（福井医大第 1 内科）

A 4. 左大腿骨骨折の経過中に多発性の陰影を呈し，
肺梗塞との鑑別が困難であった播種性結核の 1 例

○岡藤和博，中村 暁，福岡賢一

登谷大修，田中延善，中屋昭次郎

柳 碩也（福井県済生会病院内科）

岡田俊治，三浦宏之（同 整形外科）

中西功夫（金大第 1 病理）

A 5. 中葉の閉塞性肺炎を反復し，気管支ファイバー
スコープにて摘出した気管支結石の 1 例

○又野慎也，藤村政樹，金森一紀

森 孝夫，中村 忍，松田 保

（金大第 3 内科）

高倉文嗣，石野千津子（金沢通信病院内科）

小野江正臣（小野江クリニック）

座長 水上陽真（富山市民病院内科）

A 6. 労作性呼吸困難の患者にみられた鉄欠乏症につ
いて

○魚谷浩平（国療金沢若松病院呼吸器科）

水島典明，近藤邦夫，藤井章作

中西真理子（同 内科）

A 7. 当院における気管支鏡 2000 例の検討

○中村裕行，水上陽真

（富山市民病院呼吸器科）

A 8. 喀痰中の CA19-9 が著明高値を示した細気管支
肺胞上皮癌の 1 例

○嶋田佳文，石崎武志，三澤利博

鮎島慎吾，佐々木文彦，貴志洋一

東 博司，中井継彦，宮保 進

（福井医大第 3 内科）

A 9. 肺炎様陰影を呈した巨細胞癌の 1 例

○前 也寸志（健生病院内科）

帯刀裕之，清水 颯，清光義則

（城北病院内科）

細 正博（金大第 2 病理）

A 10. Colony stimulating factor (CSF) 産生が疑わ
れる肺癌の 1 例

○楠 憲夫，荒木一郎，安川善博

田中 功，藤田 一，松田博人

平岩義雄，文字 直，吉田 誠

品川俊男，永森正秋（富山赤十字病院内科）

辻口 大，林 義信，永井 晃

(同 心臓血管呼吸器外科)

谷本一夫 (金大医療技術短大)

北川正信 (富山医薬大第1病理)

座長 藤田正俊 (富山医科薬科大学第2内科)

A 11. 大動脈弁逆流症における nifedipine による後
負荷軽減の血行動態への作用

○森 清男, 榊田昌之助, 由雄裕之
(芳珠記念病院内科)

分校久志, 谷口 充 (金大核医学科)

A 12. 脳梗塞と心筋梗塞を合併した1症例

○中谷彰男, 関本 博, 松本正幸
中野利美, 松本幹生, 鈴木俊之
林 光義, 納藤真生, 土屋 博
奥谷幸彦 (金沢医大老年病科)

A 13. 房室ブロックと右室機能障害を示した post-
myocarditis と思われる1例

○家城恭彦, 重田 亨, 野田隆志
五十嵐厚, 前野孝治, 中村由紀夫
久保田幸次, 高田重男, 池田孝之
(金大第1内科)

A 14. 心臓腫瘍の1治験例 (左房巨大粘液腫)

○北川鉄人 (北川内科クリニック)

座長 田中三千雄 (富山医科薬科大学第3内科)

A 15. 蛋白漏出を伴った Radiational enteritis の1
例

○浜田誠人, 平井潤子, 大塚 実
塩原信太郎, 立村森男, 森永健市
(浅ノ川総合病院内科)
神野正博, 秋本龍一 (同 外科)

A 16. トルエン吸入による急性肺炎の1例

○増永高晴, 大石 誠, 柴山真介
津川喜憲, 村本弘昭, 吉村 陽
水毛生直則, 織田邦夫 (鳴和総合病院内科)

A 17. 巨大な嚢胞形成を伴った非機能的脾臓腫瘍の1
例

○若林時夫, 森本日出夫, 鈴木邦彦
田辺 釧, 木田 寛, 杉岡五郎
(国立金沢病院内科)
高仲 強 (同 放射線科)
滝田佳夫 (同 外科)
渡辺駿七郎 (同 研究検査科)

A 18. 重症アルコール性肝炎の1例

○皆川 薫, 市田隆文, 稻土修嗣
康山俊学, 井上恭一, 佐々木博
(富山医薬大第3内科)

A 19. 肝障害を伴った神経性食思不振症の2例

○山形章夫, 若栗宣人, 広瀬昭一郎

中川彦人, 西邨啓吾, 久保 正

(富山県立中央病院内科)

三輪淳夫 (同 病理検査科)

B 会場

座長 高桜英輔 (黒部市民病院内科)

B 1. ステロイド中断後, ショックを呈した糖尿病の
1例

○岡田博司, 細島弘行, 宮内英二
岩崎良二, 小豆沢定秀, 木越俊和
山本郁夫, 内田健三, 森本真平
(金沢医大内分泌内科)

B 2. Giant hypertrophic gastritis を伴った糖尿病
透析例

○酒井泰征, 本定 晃
(社会保険勝山病院内科)

B 3. Chronic thyrotoxic myopathy の1例

○高山嘉宏, 藤井寿美枝, 中川 淳
岡本清也, 杉原範彦, 清水賢巳
中林 肇, 竹田亮祐 (金大第2内科)
松原四郎 (同 神経内科)
笹谷 守 (輪島病院内科)

B 4. Primary empty sella を合併した下垂体前葉機
能低下症の2例

○伊勢 拓之, 横川 博, 高桜英輔
寺田康人, 牧野 博 (黒部市民病院内科)
立花 修, 沖 春海 (同 脳神経外科)
蒲田敏文 (同 放射線科)

座長 遠山龍彦 (高岡市民病院内科)

B 5. 汎血球減少症を合併した Basedow 病の1例

○塩原信太郎, 浜田誠人, 平井潤子
大塚 実, 立村森男, 森永健市
(浅ノ川総合病院内科)

B 6. 発作型褐色細胞腫の1例

○池本明人, 前川直美, 秋田裕一
山岸利栄, 林 正則, 尾崎監治
大隅敏光, 豊岡重剛, 川瀬満雄
向野 栄 (福井赤十字病院内科)
原田武尚, 田中猛夫 (同 外科)
佐藤重彦, 中村三郎 (金大第1内科)

B 7. 慢性B型肝炎に伴った膜性増殖性糸球体腎炎
の1例

○上野 均, 藤田益雄, 泉野 潔
安本耕太郎, 三川正人, 飯田博行
篠山重威 (富山医薬大第2内科)
小島 隆 (同 第3内科)

B 8. 両側水腎症をきたした Retroperitoneal

fibrosis の 1 例

- 永井国雄, 蘇馬隆一郎, 瀬田 孝
佐藤 隆, 三輪梅夫, 大家他喜雄
(石川県立中央病院内科)
宮城徹三郎 (同 泌尿器科)
出町 洋 (同 放射線科)
林 守源 (同 病理科)

B 9. 子宮頸部及び右乳房腫瘍で発症し AML に進展した Granulocytic sarcoma (GS) の 1 例

- 佐々木欣也, 上田孝典, 神谷健一
吉村輝夫, 津谷 寛, 安藤精章
高山博史, 内田三千彦, 原 晃
中村 徹 (福井医大第 1 内科)
新本修一, 中川原儀三 (同 第 1 外科)
中津川重一, 石井 靖 (同 放射線科)

座長 檜山幸孝 (富山医科薬科大学和漢診療部)

B 10. 脊髄性筋萎縮症の 1 例

- 中崎繁明, 武田 康, 斎藤正典
石井 陽, 浜田 明, 谷井淑夫
北尾 武 (国療北潟病院内科)

B 11. Sensory ataxia と悪性腫瘍の 2 症例

- 林 茂, 坂尻顕一, 杉山 有
島 孝仁, 井手芳彦, 高守正治
(金大神経内科)

B 12. 症候性未破裂脳動脈瘤の検討

- 山本祐一, 濱田秀剛, 正印克夫
黒田英一, 藤井博之, 伊藤治英
山本信二郎 (金大脳神経外科)

B 13. 肺間質に著明なアミロイドの沈着を認めた慢性関節リウマチの 1 例

- 中崎 聡, 村山隆司
(金沢リハビリテーション病院
リウマチ膠原病センター)
野々村昭孝 (金大第 2 病理)

座長 加藤弘巳 (富山医科薬科大学第 1 内科)

B 14. 慢性関節リウマチに多発性筋炎ならびに橋本病を合併した 1 例

- 後藤博三, 嶋田 豊, 三瀬忠道
檜山幸孝, 土佐寛順, 寺澤捷年
(富山医大和漢診療部)

B 15. 多彩な症状を呈した結節性動脈炎と思われる 1 例

- 仁木健雄, 上田幹夫, 森 孝夫
中村 忍, 松田 保 (金大第 3 内科)
北川一雄, 久藤豊治 (久藤病院)

B 16. 進行性四肢麻痺, 下血を主徴とする結節性動脈周囲炎の 1 例

- 朝日寿実, 浦風雅春, 杉山英二
加藤弘巳, 矢野三郎 (富山医大第 1 内科)
松井一裕 (同 第 1 病理)
岡田尚美 (済生会高岡病院内科)
松沢 仁 (同 整形外科)

B 17. 下大静脈および門脈系の多発性閉塞を伴った血管性 Behçet 病の 1 例

- 柳 昌洋, 高橋洋一, 黒崎正夫
(富山市民病院内科)
松本録一 (同 皮膚科)
杉原政美, 小林昭彦 (同 放射線科)

第 3 会場 外 科 分 科 会

第 4 会場

第 208 回北陸外科学会

一般演題 A 会場

座長 永井 晃

(富山赤十字病院心臓血管呼吸器外科)

1. 肺 Dirofilaria 症の 1 手術例

- 中村 隆, 草島義徳
(富山市民病院呼吸器外科)
森 和弘, 小林弘信, 嶋 裕一
小西一朗, 広野慎介 (同 外科)
中林裕行, 水上陽真 (同 呼吸器科)
杉原政美 (同 放射線科)
高柳尹立 (同 研究検査科病理)
吉村裕之 (金大寄生虫学)

2. 月経随伴性気胸の 1 治療例

- 古野利夫, 吉野 武 (国療富山病院外科)

3. 高齢者気管支瘻膿胸症例に対する治療法の検討

- 土島秀次, 坂坂浩史, 湯浅幸吉
岩波 洋, 松原純一, 清水 健
(金医大胸部心臓血管外)

4. 気道確保に難渋した広範囲気管・気管支結核の 1 例

- 小林弘明, 佐藤日出雄
(石川県中呼吸器外科)
林 守源 (同 中検病理)
飯田茂穂 (金沢市立外科)

5. Tracheobronchopathia osteochondroplastica の 1 例

- 宮澤秀樹, 能登啓文, 中川禎二
戸島雅宏, 吉岡幸男, 大塚吾郎
中坪直樹, 西谷 泰, 藤村光夫
(富山県中胸部外科)
北川和久 (同 耳鼻咽喉科)
里村 敬, 川上年朗 (同 麻酔科)

- 北川正信 (同 病理)
6. 肺小細胞癌に対する集学的治療の検討
○池谷明彦, 龍村俊樹, 津田基晴
杉山茂樹, 辻本 優, 西出良一
北沢慎次, 小山信二, 山本恵一
(富山医薬大 1 外)
北川正信 (同 第 1 病理)
7. 外傷性横隔膜破裂の 2 例
○林 義信, 辻口 大, 永井 晃
(富山赤十字病院心臓血管呼吸器外)
座長 会田 博
(金沢医科大学胸部心臓血管外科)
8. Scimitar Syndrome の 1 手術例
○白川尚哉, 会田 博, 坂本 滋
金戸善之, 豊田恒良, 清水 健
(金医大胸部心臓血管外)
石田哲也, 竹越 襄, 村上暎二
(同 循環器内科)
9. 無症状で心エコー検査により発見された左房粘液腫の 1 手術例
上山圭史, 三崎拓郎, 坪田 誠
向井恵一, 浅井 徹, 松永康弘
岩 喬 (金大 1 外)
10. 重篤な術後せん妄状態を呈した 1 開心術症例
○松本 康, 大中正光, 大橋博和
堤 泰史, 村上 実, 田中 孝
(福井循環器病院外科)
11. 甲状腺機能異常を合併する虚血性心疾患の A-C バイパス術
○松永康弘, 川筋道雄, 手取屋岳夫
川尻文雄, 渡辺 剛, 三崎拓郎
岩 喬 (金大 1 外)
12. A-C バイパス術を同時施行した 2 弁置換術の 1 例
○豊田恒良, 坂本 滋, 金戸善之
白川尚哉, 会田 博, 清水 健
(金医大胸部心臓血管外)
13. 逆行性冠灌流による心筋保護の有用性
○鈴木 衛, 湖東慶樹, 浜中秀樹
西出良一, 杉木 実, 村上 新
橋本英樹, 明元克司, 永井 晃
上山武史 (富山医薬大 1 外)
座長 富川正樹 (富山医科薬科大学第 1 外科)
14. 開窓術を行った解離性大動脈瘤の 1 例
○長末正己, 保坂浩史, 松原純一
清水 健 (金医大胸部心臓血管外)
15. 89 歳, 破裂性腹部仮性大動脈瘤の 1 治療例
○森岡浩一, 西井宏有, 藤井秀則
井隼彰夫, 千葉幸夫, 村岡隆介
(福井医大 2 外)
16. 腹部大動脈硬化性閉塞症に合併した虫垂憩室症の 1 手術例
○中坪直樹, 藤村光夫, 西谷 泰
戸島雅宏, 吉岡幸男, 大塚吾郎
宮沢秀樹, 中川禎二, 能登啓文
(富山県中呼吸器循環器外)
増田信二, 三輪淳夫 (同 病理)
17. 40 才台 Leriche 症候群の 2 症例
○遠藤将光, 関 雅博, 小林弘明
佐藤日出夫, 浅井 徹, 木谷正樹
能登 佐 (石川県中胸部心臓血管外)
18. 上肢血行再建例の検討
○牧本充生, 横川雅康, 村上 新
大場泰良, 浜中秀樹, 高野 徹
古野利夫, 富川正樹, 上山武史
(富山医薬大 1 外)
19. 大伏在静脈 in situ bypass 法による下肢動脈血行再建術の経験
○戸島雅宏, 藤村光夫, 西谷 泰
吉岡幸男, 大塚吾郎, 中坪直樹
宮沢秀樹, 中川禎二, 能登啓文
(富山県中呼吸器循環器外)
20. Clostridium difficile による創感染をきたした Buerger 病の 1 例
○川辺 圭一, 浦山 博, 藤岡重一
渡辺洋宇, 岩 喬 (金大 1 外)
座長 野口晶邦 (金沢大学第 2 外科)
21. 超音波ガイドによる甲状腺穿刺細胞診の有用性
○道岸隆敏, 利波紀久, 久田欣一
(金大核医学)
野口晶邦 (同 2 外)
谷本一夫 (金大医療短大)
22. 異所性甲状腺癌と思われる 1 症例
○村 俊成, 野村泰三, 坂東平一
(金沢通信病院外科)
道岸隆敏 (金大核医学)
渡辺駿七郎 (国立金沢病理)
23. Basedow 氏病に合併した甲状腺癌症例の検討
○土田 敬, 田中松平, 松 智彦
品川 誠, 大村健二, 中島久幸
森 善裕, 川浦幸光, 岩 喬
(金大 1 外)
24. 乳腺疾患に対する DSA の経験
○佐伯俊雄, 唐木芳昭, 宗像周二

- 穂苅市郎, 川西孝和, 山下芳郎
田沢賢次, 藤巻雅夫 (富山医薬大 2 外)
座長 小西孝司 (金沢大学第 2 外)
25. 肝内結石症例の検討
○滝田佳夫, 太田 一, 石田哲也
道場昭太郎, 木下睦之, 浅井伴衛
津田宏信, 高松 斉 (国立金沢外科)
26. 肝膿瘍の 2 例 — 治癒例と剖検例 —
○大島俊哉, 高野直樹 (国立鯖江病院外科)
松葉 明, 小島靖彦, 藤田秀春
中川原儀三 (福井医大 1 外)
八木雅夫, 泉 良平 (金大 2 外)
27. 肝膿瘍症例の検討
○瀬戸啓太郎, 高田道明, 山本広幸
横田 啓, 斎藤人志, 喜多一郎
高島茂樹, 木南義男 (金医大一般消化器外科)
28. 肝嚢胞腺腫の 1 例
○北林一男, 田中茂弘 (上市厚生病院外科)
泉 良平 (金大 2 外)
小林昭彦 (富山市民病院放射線科)
高柳尹立 (同 研究検査科)
29. エタノール注入療法後に切除した肝硬変合併肝癌
の 1 例
○津川浩一郎, 泉 良平, 北川裕久
藪下和久, 渡辺俊雄, 大堀 功
清水康一, 小西孝司, 宮崎逸夫
(金大 2 外)
鶴浦雅志, 小林健一 (金大 1 内)
30. 肝動脈動注埋込みポンプ症例の効果と反省点
○小杉光世, 清原 薫, 山下良平
吉田政之, 高山和男, 山脇 優
小杉 長 (市立砺波総合病院外科)
角田清志, 荒川文敬 (同 放射線科)
31. 原発性肝癌および転移性肝癌に対する RF 局所温
熱療法の効果
○浦出雅昭, 米村 豊, 藤村 隆
竹川 茂, 宮田龍和, 鎌田 徹
山口明夫, 泉 良平, 三輪晃一
宮崎逸夫 (金大 2 外)
中嶋和喜, 久住治男 (同 泌尿器科)
斉藤泰男, 高島 力 (同 放射線科)
32. 肝切除術後の血中プロスタグランジン値とその意
義
○清水康一, 渡辺俊雄, 藪下和久
小野田秀樹, 大堀 功, 橋本哲夫
高森正人, 八木雅夫, 泉 良平
小西孝司, 宮崎逸夫 (金大 2 外)
- 座長 嶋田 紘 (福井医科大学第 1 外科)
33. 小児胆嚢軸念転症の 1 例
○松下利雄, 北尾忠寛, 林 茂
古谷正晴, 原田武尚, 麻田 勇
城崎彦一郎, 田中猛夫 (福井赤十字病院外科)
34. 胃切後胆石症の検討
○木村寛伸, 永川宅和, 角谷直孝
前田基一, 上田順彦, 萱原正都
秋山高儀, 太田哲生, 上野桂一
米村 豊, 三輪晃一, 宮崎逸夫
(金大 2 外)
35. 総胆管結石症の検討
○伏田幸夫, 関野秀継, 佐久間寛
竹山 茂, 西田良夫, 磯部次正
(黒部市民病院外科)
36. 術後 T-tube により施行した胆道内圧測定につ
いての検討
○原 和人, 横山 隆, 古田和雄
(城北病院外科)
37. 内胆汁瘻症例の検討
○増子 洋, 沢 敏治, 丸岡秀範
中野達夫, 谷 卓, 堀地 肇
高島 達, 黒田吉隆, 辻 政彦
(富山県中外科)
38. 組織型を異とした同時性胆嚢胆管癌の 1 症例
○広瀬宏一, 辻本 優, 若狭林一郎
牛島 聡, 村田修一, 清崎克美
(氷見市民病院外科)
座長 辻 政彦 (富山県立中央病院外科)
39. 胆嚢癌の肝内直接浸潤に関する検討
○角谷直孝, 永川宅和, 木村寛伸
上田順彦, 前田基一, 萱原正都
太田哲生, 上野桂一, 宮崎逸夫
(金大 2 外)
40. 胆管癌切除例の検討
○福島 弥, 嶋田 紘, 松葉 明
荒井理夫, 安川ひろ美, 平楽 泰
山林泰三, 新本修一, 野手雅夫
広瀬和郎, 関 弘明, 磯部芳彰
小島靖彦, 藤田秀春, 中川原儀三
(福井医大 1 外)
41. 膵内胆管癌の 2 例の治療経験
○杉木 実, 矢後 修, 湊 治志
山口敏之, 稲田章夫, 牧本充生
辻本 優, 笠島 学, 山本恵一
(富山医薬大 1 外)
尾島敏夫 (尾島外科)

42. 膵・胆管同時性重複癌の1例

○神野正博, 藤本敏博, 秋本龍一
(浅ノ川総合外科)
池田誠人, 北中 勇, 森永健市
(同 内科)

43. 早期胃癌の発見を契機に診断された膵癌の1例

○津沢豊一, 山本克弥, 霜田光義
中嶋良作, 小田切治世, 鈴木修一郎
阿部要一, 田沢賢次, 藤巻雅夫
(富山医薬大2外)

44. 膵石症の検討(手術症例を中心にして)

○岩佐和典, 鎌田 徹, 松田祐一
上野一夫, 島 弘三(富山労災病院外科)

B会場

座長 藤田秀春(福井医科大学第1外科)

45. 魚骨による食道穿孔の1例

○横山 隆, 古田和雄, 原 和人
(城北病院外科)
大野健次, 山本和利, 清水義則
(同 内科)

46. 下咽頭, 中部食道重複癌の1治験例

○村上真也, 山村浩然, 花立史香
宗本義則, 佐々木正寿, 高島一郎
足島 寛, 林外史英, 山田哲司
北川 晋, 中川正昭(石川県中消化器外科)
徳田紀久夫, 小森 貴(同 耳鼻咽喉科)
佐藤日山夫, 小林弘明(同 呼吸器外科)
遠藤将光(同 心臓血管外科)

47. 切除不能食道癌及び胃癌に対する人工食道挿入術の検討

○伴登宏行, 平野 誠, 橘川弘勝
酒徳光明, 斉藤 裕, 龍沢俊彦
(厚生連高岡病院外科)

48. 食道癌に対する非開胸食道抜去法の術後合併症について

○石沢 伸, 山田 明, 山下 巖
田内克典, 中村 潔, 加藤 博
穂苅市郎, 吉田真佐人, 島崎邦彦
小田切治世, 坂本 隆, 唐木芳昭
田沢賢次, 藤巻雅夫(富山医薬大2外)

49. DNA ploidy pattern からみた食道癌症例の検討

○野手雅幸, 藤田秀春, 広瀬和郎
土山智邦, 新本修一, 福島 弥
関 弘明, 松葉 明, 磯部芳彰
小島靖彦, 嶋田 紘, 中川原儀三
(福井医大1外)

八木雅夫, 宮崎逸夫(金大2外)

座長 上田 博(金沢大学がん研究所外科)

50. 貧血症状を来たし発見された若年者胃神経鞘腫の1例

金 定基, 三浦将司, 藤澤克憲
皆川真樹, 加藤善彦, 三井 毅
浅田康行, 飯田善郎, 黒田 譲
藤沢正清(福井済生会病院外科)
河原 栄, 中西功夫(金大1病理)

51. 超音波内視鏡による胃癌浸達度の検討

○長谷川啓, 米村 豊, 浦出雅昭
杉山和夫, 西村元一, 薮下和久
藤村 隆, 小坂健夫, 山口明夫
三輪晃一, 宮崎逸夫(金大2外)

52. 早期胃癌リンパ節転移の検討

一縮少手術の可能性について

○黒阪慶幸, 片山寛次, 松木伸夫
巴陵宣彦, 可西右使(高岡市民病院外科)
岡田英吉, 北川正信(富山医薬大1病理)

53. 早期胃癌に対する手術術式

○藤村 隆, 米村 豊, 浦出雅昭
杉山和夫, 西村元一, 長谷川啓
小坂健夫, 山口明夫, 三輪晃一
宮崎逸夫(金大2外)

54. pm 胃癌の検討

○荒井理夫, 広瀬和郎, 小林泰三
新木修一, 福島 弥, 野手雅幸
松葉 明, 関 弘明, 磯部芳彰
小島靖彦, 嶋田 紘, 藤田秀春
中川原儀三(福井医大1外)

座長 川浦幸光(金沢大学第1外科)

55. 胃癌における大動脈周囲リンパ節郭清例の検討

○酒徳光明, 橘川弘勝, 平野 誠
斉藤 裕, 伴登宏行, 龍沢俊彦
(厚生連高岡病院外科)

56. 胃癌に対する傍大動脈リンパ節郭清症例の検討

○松木伸夫, 黒阪慶幸, 片山寛次
巴陵宣彦, 可西右使(高岡市民病院外科)
岡田英吉, 北川正信(富山医薬大1病理)

57. A領域胃癌リンパ節転移の検討

○萩野知己, 上田 博, 表 和彦
出口 康, 源 利成, 伊藤 透
藤本敏博, 浅井 透, 菅 敏彦
高橋 豊, 大井章史, 磨井正義
(金大がん研外科)

58. C領域胃癌の治療(手術術式と予後について)

○増山喜一, 小田切治世, 中村 潔

- 加藤 博, 穂苅市郎, 吉田真佐人
山田 明, 島崎邦彦, 坂本 隆
唐木芳昭, 田沢賢次, 藤巻雅夫
(富山医薬大2外)
59. 当科における胃全剝症例の検討
○山村浩然, 立花史香, 宗本義則
佐々木正寿, 村上真也, 高島一郎
疋島 寛, 林外史英, 山田哲司
北川 晋, 中川正昭(石川県中消化器外科)
座長 広野禎介(富山市民病院外科)
60. 多発胃癌症例の検討
○萩原広彰, 後藤田治公, 坂田則昭
高島茂樹, 木南義男(金医大一般消化器外科)
61. 多発ならびに重複胃癌の検討
○中野達夫, 黒田吉隆, 丸岡秀範
増子 洋, 堀地 肇, 谷 卓
高島 達, 沢 敏治, 辻 政彦
(富山県中外科)
62. 当科で経験した残胃の癌の検討
○牛島 聡, 辻本 優, 廣瀬宏一
若狭林一郎, 村田修一, 清崎克美
(氷見市民病院外科・胃腸科)
63. 胃癌リンパ節転移巣におけるEGFとEGFリセプターの検討
○杉山和夫, 米村 豊, 伏田幸夫
藤村 隆, 長谷川啓, 西村元一
宮田龍和, 小坂健夫, 山口明夫
三輪晃一, 宮崎逸夫(金大2外)
64. 胃癌に対する持続腹膜灌流温熱療法(CHPP)術後管理における問題点
○片山寛次, 松木伸夫, 黒阪宣彦
可西右使(高岡市民病院外科)
礎部次正, 西田良夫(黒部市民病院外科)
座長 龍村俊樹(富山医科薬科大学第1外科)
65. Bypass手術後の小腸吻合部潰瘍出血の1例
○古田和雄, 横山 隆, 原 和人
(城北病院外科)
山本和利, 清光義則(同 内科)
渡辺騏七郎(国立金沢病理)
66. 小腸穿孔例の検討
伊与部尊和, 大原鐘敏, 秋山高儀
魚岸 誠, 素谷 宏(恵寿総合病院胃腸科)
岡田仁克(金大1病理)
鈴木正行(金大放射線科)
67. 急性腸間膜動脈閉塞症症例の検討
○松 智彦, 田中松平, 土田 敬
品川 誠, 大村健二, 中島久幸
- 森 善裕, 川浦幸光, 岩 喬
(金大1外)
68. 短腸症候群症例の検討
○藤村 隆, 八木雅夫, 小矢崎直博
小野田秀樹, 高森正人, 上野桂一
山口明夫, 米村 豊, 泉 良平
永川宅和, 三輪晃一, 宮崎逸夫
(金大2外)
正司政夫, 中野泰治(珠洲総合病院外科)
吉光外宏, 富田富士夫
(国立療養所敦賀病院外科)
69. 小腸原発悪性リンパ腫の3例
○後藤田治公, 坂田則昭, 高島茂樹
木南義男(金医大一般消化器外科)
座長 谷川允彦(福井医科大学第2外科)
70. 虫垂を調べて(その11)
30年間に行った虫垂切除31,821例について
○小林喜順, 石黒信彦, 小林弘明
(福井市小林病院)
71. 大腸穿孔をきたした日本住血吸虫症の1例
○斉藤人志, 桐山正人, 檜引 健
高島茂樹, 木南義男(金医大一般消化器外科)
松能久雄(同 病理)
池田照明, 及川陽三郎(同 医動物学)
72. 直腸エンドメトリオージスの1例
○上野一夫, 岩佐和典, 鎌田 徹
松田祐一, 島弘三(富山労災病院外科)
野田八嗣(同 内科)
岡田保典(同 病理)
73. 炎症性ポリポージスを伴った直腸脱の1例
○横田 啓, 萩原広彰, 桐山正人
喜多一郎, 高島茂樹, 木南義男
(金医大一般消化器外科)
小西二三男(同 病理)
74. 治療方針に難渋した大腸ポリポージスの1例
○嶋 裕一, 森 和弘, 小林弘信
中村 隆, 草島義徳, 小西一郎
広野禎介(富山県市民病院外科)
高橋洋一, 高柳尹立(同 研究検査科)
75. いわゆるMeigs症候群様症状を呈した大腸, 卵巣重複癌の1例
○木元文彦, 長谷川洋, 関川 博
橋爪泰夫, 魚津幸蔵(富山赤十字病院外科)
鳥取孝成(同 産婦人科)
朝倉昌文(朝倉診療所)
北川正信, 野田 誠(富山医薬大1病理)
座長 高島茂樹

(金沢医科大学一般消化器外科)

76. びまん浸潤型大腸癌 4 例の検討

○竹森 繁, 田沢賢次, 山本克弥
新井英樹, 吉田真佐人, 鈴木康将
笠木徳三, 小田切治世, 宗像周二
藤巻雅夫 (富山医薬大 2 外)

77. 遠隔 (肝, 肺, 脳) 転移を伴う大腸癌症例の検討

○山脇 優, 小杉光世, 山下良平
清原 薫, 吉田政之, 高山和男
小林 長 (市立砺波総合病院外科)
安念有声 (同 病理)

78. EEA を用いた前方切除術症例の検討

○飯田善郎, 三浦将司, 皆川真樹
藤澤克憲, 加藤善彦, 金 定基
三井 毅, 浅田康行, 黒田 譲
藤沢正清 (福井済生会病院外科)

79. 直腸癌に対する当科の術式選択について

○藤井秀則, 森岡浩一, 野口秀樹
木村哲也, 西井宏有, 井上 弘
高橋康嗣, 森本秀樹, 丸橋和弘
谷川允彦, 村岡隆介 (福井医大 2 外)

80. 直腸癌他臓器合併切除例の検討

○小矢崎直博, 山口明夫, 荻下和久
熊木健雄, 西村元一, 加藤真史
小坂健夫, 米村 豊, 三輪晃一
宮崎逸夫 (金大 2 外)
高島茂樹 (金医大一般消化器外科)

81. 痔瘻におけるクシャラ・スートラ (Ayurvedic treatment) の臨床成績とその成分分析の試み

○山本克弥, 田沢賢次, 山下 巖
藤川卓爾, 霜田光義, 広川慎一郎
川西孝和, 鈴木康将, 笠木徳三
真保 俊, 藤巻雅夫 (富山医薬大 2 外)
Upali Pilapitiya, 服部征雄, 難波恒雄
(同和漢薬研究所資源開発)
座長 唐木芳昭 (富山医科薬科大学第 2 外科)

82. 右上腕骨病的骨折および閉塞性黄疸をきたした悪性リンパ腫の 1 例

○高橋嘉彦, 山崎英雄, 岩佐隆明
(国立山中病院外科)
中村一誠, 堀本孝士, 原田 誠
(同 整形外科)
中村勇一, 稲坂 暢 (同 内科)
松能久雄 (金医大病理)

83. 副脾より発生したと思われる epidermoid cyst の 1 例

○加藤善彦, 三浦将司, 藤澤克憲

皆川真樹, 金 定基, 三井 毅
浅田康行, 飯田善郎, 黒田 譲
藤沢正清 (福井済生会病院外科)
河原 栄, 中西功夫 (金大 1 病理)

84. 褐色細胞腫手術症例の検討

○松本 尚, 八木雅夫, 小矢崎直博
小野田秀樹, 杉山和夫, 高森正人
小坂健夫, 清水康一, 山口明夫
米村 豊, 泉 良平, 小西孝司
永川宅和, 宮崎逸夫 (金大 2 外)

85. 後腹膜腫瘍症例の検討

○田中松平, 土田 敬, 松 智彦
品川 誠, 大村健二, 中島久幸
森 善裕, 川浦幸光, 岩 喬
(金大 1 外)

86. 術後紅皮症と思われた 1 例

○小林泰三, 安川ひろみ, 荒井理夫
平泉 泰, 福島 弥, 新本修一
野手雅幸, 廣瀬和郎, 松葉 明
関 弘明, 磯部芳彰, 小島靖彦
嶋田 紘, 藤田秀春, 中川原儀三
(福井医大 1 外)

87. 術後症例に対する活性酸素関連物質測定の意義

○小野田秀樹, 八木雅夫, 松本 尚
高森正人, 伊藤雅之, 清水康一
山口明夫, 米村 豊, 泉 良平
小西孝司, 永川宅和, 三輪晃一
宮崎逸夫 (金大 2 外)

第 5 会場 神経科精神科分科会

第 108 回北陸精神神経学会

一般演題

1. 長期高圧酸素療法が有効であった間欠型一酸化炭素中毒の 2 症例

○久保田陽介, 清田吉和, 窪田 孝
地引逸龜, 小山善子, 山口成良
(金沢大医神経精神)

2. 金沢大学神経科精神科睡眠障害外来における受診患者の概要について

○古田寿一, 森川恵一, 前田義樹
石黒信治, 上野勝彦, 山口成良
(金沢大医神経精神)
佐野 譲 (国立金沢病院神経科)
金 英道 (公立能登第二病院)
浜原昭仁 (県立高松病院)

3. 不眠症に対するフルトプラゼパム 1 日 1 回投与による治療効果について

- 佐野 譲, 近沢茂夫
(国立金沢病院神経精神)
4. カルバマゼピンが著効を示した脳波異常を伴うセ
ネストパチーの1例
○和田有司, 山口成良 (金沢大医神経精神)
金 英道 (公立能登第二病院)
5. Alzheimer 病と思われる初老期痴呆の1例
ー神経心理学的症状を中心にー
○中山 涉, 玉井 顕, 榎戸秀昭
鳥居方策 (金沢大医大神経精神)
松原三郎 (松原病院)
6. 分裂病患者における血中ホルモン値と精神症状
○猪山 茂, 中山 涉, 高木哲郎
竹内義孝, 鳥居方策 (金沢大医大神経精神)
7. アルコール依存症に対する内観療法の試み
○草野 亮 (福井県立精神病院)
吉本博昭, 本田 徹, 山野俊一
(富山市民病院神経精神)
8. 家族性失調症の1剖検例 (II)
ー髄液異常と脈絡叢・脳室上衣ー
○中村一郎, 小林克治, 福谷祐賢
鈴木道雄, 川崎康弘, 山口成良
(金沢大医神経精神)
鳥居方策 (金沢大医大神経精神)
倉知正佳 (富山医大神経精神)
9. prolactinoma 摘出後著明な幻覚妄想の出現をみ
た1症例
○三崎 究, 松原六郎, 越野好文
伊崎公徳 (福井大医大神経精神)
10. UPI による医大入学生の精神保健スクリーニン
グ (第2報)
ー入学後の留年生, 休学生についてー
○本多みよ子, 伊藤達彦, 越野好文
伊崎公徳 (福井大医大神経精神)
三木勲男 (福井大保健管理センター)
11. 前思春期の神経性食思不振症の1例
○谷口保子 (富山県立中央病院精神科)
12. いわゆる退却神経症の1例の夢分析から
○倉田孝一 (富山医大神経精神)
13. 抗うつ剤血中濃度測定の自動化 (第2報)
○坂本 宏, 長谷川充, 木戸日出喜
山口成良 (金沢大医神経精神)
倉田孝一 (富山医大神経精神)
井上正雄 (七尾松原病院)
14. 難治性うつ病に対するミアンセリンの併用効果
○谷井靖之, 三辺義雄, 大田良子
倉田孝一, 倉知正佳 (富山医大神経精神)

15. Typus melancholicus の文化人類学的考察
ー富山県の場合 (その11)ー
○武内 徹 (高岡市民病院神経精神)
16. 保健所保健婦の受け持つ精神障害者
ーアンケート調査からー
○棟居俊夫, 中島勝子, 小永喜代子
齊藤莊二, 坪田正男, 石丸能生子
草野 亮 (福井県精神衛生センター)
17. 統計からみた T 総合病院精神科神経科の現状と
問題点
○吉本博昭, 本田 徹, 岸谷和之
山野俊一 (富山市民病院神経精神)

特別講演

「中国神経精神医学の一端について」

山口成良 (金沢大医神経精神)

第6会場 放射線・核医学科分科会

一般演題

1. SPECT による陽性小病変の検出限界と定量測定
○中嶋憲一, 村守 朗, 利波紀久
久田欣一 (金大核)
飯田泰治 (金大中核)
2. ^{201}Tl 心筋血流マップによる PTCA の効果判定
○村守 朗, 中嶋憲一, 谷口 充
分校久志, 利波紀久, 久田欣一
(金大核)
3. 放射性ヨード標識側 (メチル基) 脂肪酸
(BMIPP) のラットにおける心筋内分布の検討;
正常および高血糖時の TI-201 との比較
○谷口 充, 分校久志, 村守 朗
四位例靖, 南部一郎, 中嶋憲一
利波紀久, 久田欣一 (金大核)
4. ^{67}Ga の悪性腫瘍集積機序について
○山田典央 (富山県山田病院)
久田欣一 (金大核)
安東 醇 (金大医療短大)
5. ^{67}Ga -citrate が集積した肺炎と思われた2症例
○油野民雄, 横山邦彦 (金大核)
鹿熊一人 (能登総合放)
一柳健次 (福井県立放)
6. 脾の CT 診断における希釈造影剤経口投与の有
用性について
○古本尚文, 亀井哲也, 中嶋愛子
征矢敏夫, 滝 邦康, 南部一郎
二谷立介, 瀬戸 光, 柿下正雄
(富山医大放)
石崎良夫 (井波厚生病院放)

7. Tc-99mDTPA 腎シンチグラフィーが診断および経過観察に有用であった, Urinary Extravasation の 1 症例

○谷口 充, 油野民雄, 久田欣一
(金大核)

8. Neurnblastoma の MRI

○大津留健, 三矢哲英, 松田昌夫
田渕啓樹, 宝田 陽, 興村哲郎
山本 達 (金医大放)

9. 水頭症患者のシャント流量と CT 像

○池田清延, 小路英彦, 伊藤治英
山本信二郎 (金大脳神経外)

10. 結核性脳脊髄膜炎の画像診断

○高島 貢, 高橋範雄, 岩崎俊子
奥村亮介, 木村一秀, 外山貴士
周藤裕治, 小島輝男, 石井 靖
(福井医大放)

11. Leigh 症候群の画像診断

○金沢裕之, 釘抜康明, 玉村裕保
東光太郎, 利波久雄, 興村哲郎
山本 達 (金医大放)
川島ひろ子 (同 人類遺伝)
中川哲也 (浅ノ川総合病院放)
村田祐一 (医王病院)

12. 多発性腹腔内腫瘍を呈した小腸原発平滑筋内腫の 1 例

○荒井和徳, 宮田佐門 (富山県中放)
黒田吉隆 (同 外)
松井 修 (金大放)

13. 興味ある進展を示した胃平滑筋内腫の 1 例

○山田弘樹, 木村浩彦, 奥村亮介
木村一秀, 外山貴士, 周藤裕治
小島輝男, 石井 靖 (福井医大放)

14. 気腫胆嚢の 1 例

○小林 健, 井田正博, 高山 茂
(福井済生会放)

石黒信彦, 小林喜順 (福井市小林病院)

15. 胆嚢 adenomyomatosis の 1 例

—MRI 像について—

○亀山富明, 角谷真澄, 松井 修
高島 力 (金大放)
川上 究 (石川済生会内)

16. Pulmonary hamartoma の CT 像

○松本雅子, 永田一三, 鈴木正行
上村良一, 高島 力 (金大放)
渡辺洋宇 (同 1 外)

17. 局在診断の決定に苦慮した radiographically

occult lung cancer の 1 例

○高橋志郎, 上村良一, 永田一三
斉藤泰雄, 高島 力 (金大放)
渡辺洋宇 (同 1 外)
伊藤 広 (能登総合病院放)
生垣 茂 (輪島病院外)

第 7 会場 小児科分科会

第 220 回 日本小児科学会北陸地方会

一般演題

座長 大木徹郎

1. ハロセンの関与が疑われた劇症肝炎の 1 例

○梶原莊平, 金兼弘和, 南 聡
久保 実, 渡部礼二, 大木徹郎
(石川県中小児内科)

2. B 型肝炎無症候性キャリアーの seroconversion による急性増悪の 1 例

○北野尚史 (城端厚生病院小児科)
根井仁一 (同 内科)

3. 肝炎を合併した急性心筋炎の 1 小児例

○窓岩清治, 布施田哲也, 足立壮一
笠井康史, 加藤公孝, 一瀬 享
福原君栄, 春木伸一 (福井県立病院小児科)
坂後恒久, 山本勇志
(福井県立小児療育センター)

(指定討論者) 福井病院小児科 佐竹直子

4. 悪性腫瘍の経過中に, 心筋障害を呈した 2 例

○本郷和久, 佐伯陽子, 宮崎あゆみ
窪田博道, 市田路子, 岡田敏夫
(富山医薬大小児科)

本間一正 (富山赤十字病院小児科)

(指定討論者) 福井心臓血圧センター 林 鐘声

座長 小西 徹

5. 重症アトピー性皮膚炎に対する長期入院療法について

○武藤一彦, 谷内江昭宏, 高島 章
本家一也, 村田祐一, 石川克己
西川二郎 (国療医王病院小児科)

6. てんかん発作類似の症状 (広義の pseudo-seizure) を示した 75 例の臨床的検討

○小西 徹, 本郷和久, 村上美也子
山谷美和, 岡田敏夫 (富山医薬大小児科)

(指定討論者) 国療医王病院 村田祐一

7. 小児モヤモヤ病 4 例の MRI

○土田晋也, 藤井 靖, 栗山政憲
小西行郎, 藤沢農一, 須藤正克

(福井医大小児科)

早川克己, 奥村亮介, 石井 靖

(同 放射線科)

中村凱次, 坂口忠彦 (福井赤十字病院小児科)

小西 薫, 佐竹直子 (福井病院小児科)

8. 膜性増殖性糸球体腎炎 Type II 2 例の長期予後

○稲場 進, 馬瀬大助, 浅田礼子

樋口 晃, 岡田敏夫 (富山医大小児科)

本間一正 (富山赤十字病院小児科)

(指定討論者) 寺井病院小児科 河野 晃

座長 石黒和正

9. 7 Monosomy を呈した Myelodysplastic syndrome (Monosomy 7 syndrome) の 1 例

○林 恵三, 太田和秀, 大井 仁

石黒和正 (富山県中小児科)

宮川和彦 (金沢大小児科)

(指定討論者) 金沢大学医学部小児科 小泉晶一

10. 新生児における Vitamin K₂ syrup 投与とヘパラスチンテストについて

○阪口忠彦, 光吉 出, 金指秀一

塚原宏一, 林 修平, 中村凱次

(福井赤十字小児科)

塩谷雅英, 本多英明, 西 修

宮崎好一, 佐々木太郎, 山田 良

(同 産婦人科)

11. 第IX因子 inhibitor を有し, 頭蓋内出血を来した血友病 B の 1 例

-Proplex®による治療

○松柳ひろ子, 蓮井正樹, 三浦正義

加藤英治, 小泉晶一, 谷口 昂

(金沢大小児科)

座長 山下芳朗

12. 新生児危急チアノーゼ型心疾患に対するプロスタグランディン E₂ の長期胃内注入の試み

○吉田 均 (辰口芳珠記念病院)

(指定討論者) 福井愛育病院 岡本 力

13. Chronic idiopathic intestinal pseudoobstruction (CIIP) の 1 例

○浅井 徹, 林 宏司, 川中武司

大浜和憲, 浅野周二 (石川県中小児外科)

(指定討論者) 城北病院 松本一郎

14. 月一度の嘔吐を主訴とした 2 才児の先天性空腸狭窄症

○小沼邦男, 宮本正俊 (富山市民病院小児外科)

谷口昌史, 嶋大二郎 (砺波総合病院小児科)

(指定討論者) 富山医科薬科大学第 2 外科

山下芳朗

第 8 会場 リハビリテーション医学分科会

第 17 回 北陸リハビリテーション医学集談会

一般演題

1. 伝導失語における音韻現象について (統報)

-神経言語学的検討-

○中野 徹 (山田温泉病院)

中田直美 (山梨療養所)

亀井 尚 (福井医技学校)

中沢久夫 (福井総合病院)

2. 半側空間無視, 地誌的障害, 健忘症状, 発動性低下を呈した多発性脳梗塞の 1 例

○砂原伸彦, 坂下泰雄, 田村 茂

谷野幸子 (高志リハ病院)

大藪弘子 (兵庫リハセンター)

3. 失語症患者の言語成績と日常のコミュニケーション能力との関連

○稲村 恵, 黒川喜代美, 中澤久夫

伊藤清吾 (福井総合病院)

相野田紀子 (金沢医科大学)

4. ロジスキネジーにおける臨床的考察

○城戸智之, 高橋 護, 西森善一

中森智子, 四谷昌嗣, 石黒淑子

野上弘子 (山田温泉病院)

5. 流涎を伴う脳性麻痺の口腔機能について

○栗森由香, 野村忠雄 (金沢大学医短)

辛島千恵子 (石川整肢学園)

6. MATRIX SYSTEM CHAIR の使用経験とその適応について

○弓削 類, 鏡田智美, 山崎俊明

前田真一, 三秋泰一, 井上 昭

大沢 都 (金沢大学病院)

野村忠雄, 立野勝彦 (金沢大学医短)

7. 片麻痺用 LLB 膝ロックについて

○樋口俊幸, 大石典也, 田村 茂

長尾竜郎 (高志リハ病院)

8. 脳卒中片麻痺患者に対する Short-SHB の経験

○高瀬裕美子, 佐藤秀次, 番匠治代

山本千登勢, 土山裕之, 中島好子

久野徹也, 向 幸男 (金沢脳外科病院)

灰田信英 (金沢大学医短)

9. 片麻痺者の家屋改造に関する調査

-第 1 報 浴室について-

○寺田佳世, 田中昌代, 小谷美紀代

西出義明, 中谷藤房, 山口昌夫

(加賀八幡温泉病院)

勝木道夫 (芦城病院)

- 田川義勝（金沢大学医短）
10. 当院退院後の脳卒中患者に対するアンケート調査
○西川弘志，清光 至，荒木 茂
宮腰実紀，加藤健一，大平雅美
片田圭一，進村園生（石川県中央病院）
11. 砺波市における地域リハビリテーション活動
○岡山智加子，満保紀子，堀尾貴代美
北野喜行（砺波総合病院）
中島和之進（砺波市役所）
12. 当院における作業療法の意識調査
○沢村智恵美，本井聡美，倉内裕子
佐藤秀次（金沢脳外科病院）
田川義勝（金沢大学医短）
13. 同一作業過程での精神分裂者の異なった素材への反応
○目木由美子，四谷陽子，吉本博昭
（富山市民病院）
関 昌家（金沢大学医短）
14. 膝蓋大腿障害に対する装具治療および筋力訓練の効果について
○川谷 宏，番谷 巖（富山医薬大病院）
15. 慢性関節リウマチ患者に対する全人工肘関節置換術2症例の経験
○三井徳明，山田俊昭，堂前隆志
神戸晃男，出水利雄，松浦康考
竹野博臣，石野 洋，佐々木雅仁
（金沢医科大学）
山口昌夫（加賀八幡温泉病院）
16. RA 患者の ADL と自助具に関する 1 考察
○吉田和子，高橋雪子，中田弘美
石黒淑子（山田温泉病院）
17. 慢性閉塞性肺疾患患者における呼吸の効率について
○斉藤幸江，島田政則，平原克己
（福井総合病院）
堀 秀昭（福井医療専門学校）
18. 癌性多発神経炎を疑われた 1 症例
○山崎俊明，前田真一，三秋泰一
弓削 類，井上 昭，大沢 都
（金沢大学病院）
野村忠雄，立野勝彦（金沢大学医短）
19. 脚気により下垂手を呈した多発性神経炎の 1 症例
○麦井直樹，鏡田智美，前田真一
大沢 都，井上 昭（金沢大学病院）
野村忠雄，立野勝彦（金沢大学医短）
20. 頸椎前屈が肩関節可動域に与える影響
○今川洋一（宮崎病院）

佐々木伸一，嶋田誠一郎（福井医科大病院）
桑野寛之（中村病院）
清水義昭（福井厚生病院）
松井三男（国立敦賀病院）

21. 頸髄損傷における Rigidity

○宮沢洋一，青山邦彦，林 正岳
土田敏典，中島邦博，阿部文壮
川越清次，中村真紀子（福井総合病院）
堀 秀昭（福井医療専門学校）

第 11 会場 脳神経外科分科会

第 25 回 北陸脳神経外科集談会

一般演題

1. 頭部外傷後眩暈の検討

○七海敏之，伊藤秀樹，吉田雄樹
鈴木 豪（富山赤十字病院脳神経外科）

頭部外傷後眩暈を訴える例の中に，血管写上頭部正方位で造影される右総頸動脈が捻転位で non filling となる右総頸動脈間歇的圧迫の所見を有し，その改善を手術的に図ることにより臨床症状の著明な改善が得られる例があることが明らかになったので報告する。

対象は 10 例で，平均年齢は 45.8 歳であった。受傷後意識障害は全例で認め，頭部 CT 上異常所見は 7 例に認めた。眩暈発症後 Adson test は全例が陽性であるが神経学，頸椎単純写，頸髄 CT，および血管写上頭蓋内外血管の異常を認めない，頸部捻転位で non filling となる血管が右総頸動脈のみの例は 1 例で 9 例は椎骨動脈の non filling を伴った。9 例で手術を施行し血管写所見，臨床症状の著明な改善を認めた。

以上より頭部外傷後長期間にわたる眩暈を訴える例に対して Adson test とともに頸部血管写所見の検討が有用であることが明らかになった。

2. 外傷性頭蓋内気腫の検討

○東馬康郎，大西寛明，池田清延
伊藤治英，山本信二郎
（金沢大学医学部脳神経外科）

外傷性頭蓋内気腫を呈した 30 症例の CT 像を小気泡性限局型 16 例，大気泡性限局型 7 型，瀰漫型 7 例の 3 型に分類し，臨床症状および予後との関係を検討した。頭蓋内血腫，脳挫傷などの CT スキャン上検出された頭蓋内病変は 30 例中 19 例（63%）に存在し，うち瀰漫型は 7 例全例に認められた。脳神経障害の合併は 11 例（37%）に認められ，外転神経損傷が最も多かった。特に瀰漫型では 7 例中 4 例に脳神経障害を合併していた。髄液漏は 11 例（37%）に合併し，特に大気泡性限局型では 7 例中 5 例に髄液鼻漏を認めた。また髄膜炎

の合併は3例(10%)に認められた。Glasgow coma Scale, ADL はともに小気泡性限局型で良好であり、大気泡性限局型、瀰漫型では不良の傾向を示した。

3. 脊椎管内に著明な異常石灰化を認めた偽性副甲状腺機能低下症の1例

○原 靖, 武部吉博, 武内重二
坂倉 正, 安田敬清
(福井赤十字病院脳神経外科)

頸部脊椎管内に後縦靱帯骨化症様の著明な異常石灰化をきたした偽性副甲状腺機能低下症の1症例を経験したので報告する。症例は47才女性。小児期より dwarfism。全身ケイレンのため精査受けるも原因不明とされていた。6ヶ月前より歩行障害が出現し、徐々に悪化してきたため当科入院となる。IQは48で知能年齢は7才。血中Ca: 3.6 mEq/l, P: 5.3 mg/dl 著明な脳基底核石灰化と脊椎管内異常石灰化像を認めた。臨床像は progressive cervical myelopathy で、四肢の末梢に強い知覚障害と運動障害および排尿困難を認めた。後縦靱帯骨化症様の頸部異常石灰化はC₆レベルで最も著明でほぼ全脊椎に認められた。posterior approach でC₃~Th₂に広範囲椎弓切除術、さらに2ヶ月後、下肢痛に対してL₄L₅のlaminectomyを施行した。術後 myelopathy の改善は認められたものの、その後のリハビリによっても著明な改善はみられなかった。稀な症例と考えられるので若干の文献的考察を加えて報告する。

4. 頸部椎骨動脈の顕微鏡手術

一頸椎症による椎骨動脈圧迫の2例一

○長谷川健, 北林正宏, 向井裕修
駒井杜詩夫(厚生連高岡病院脳神経外科)

頸椎症の骨棘による椎骨動脈(VA)圧迫を原因として椎骨脳底動脈循環不全を呈した2例を報告した。症例1, 56才男。頭左方回旋時のめまい、失神感および左側頭後頭部痛、左肩・上腕痛あり。症例2, 56才女。めまい、後頭部頭重感、耳鳴、ふらつき歩行あり、頭回旋で増強、特に左を向けない。2例とも頭蓋内、心、血液、代謝、迷路機能に異常なし。頸椎X-P、脊髓造影、VAGの所見より、症例1はC5/6で前方除圧固定、左側VA除圧を、症例2で左C4/5, 5/6, 6/7, 右C4/5, 5/6のVA除圧を行った。VA除圧の手術手順は、顕微鏡下、側方骨棘除去、上下横突起孔の前半周開放、VA周囲の線維化癒着組織と外膜の除去よりなる。2例とも症状は消失し、合併症もなく、退院、日常生活に戻った。

5. 脳内出血を繰り返した cerebral amyloid angiopathy (CAA) の1例

○能崎純一(公立加賀中央病院脳神経外科)

広瀬敏士, 久保田紀彦

(福井医科大学脳神経外科)

小田恵夫(金沢大学医学部第1病理)

症例 67才男性。血圧正常。昭和59年5月、右頭頂葉に皮質下出血を呈する。昭和62年5月、左中側頭回に皮質下出血を呈した。血腫除去術施行。脳は非常に脆く、易出血性であった。血腫近傍より、くも膜を含め biopsy した。

組織所見 HE 染色; 小動脈では、中膜は eosin 好性であり、肥厚、筋細胞核の消失を認めた。congo red 染色; 小動脈の中膜は congo red 陽性であり、偏光顕微鏡下に緑黄色の偏光を示した。この症例は amyloid の沈着により、小動脈中膜が障害され、破綻性出血を来したと考えられる。皮質下出血で、正常血圧、再発例、易出血性を示す症例では CAA を考慮する必要がある。

6. persistent proatlantal artery

一1経験例および血管写上の鑑別診断一

○鬼塚圭一郎, 栗本昌紀, 桑山直也
(富山医科薬科大学脳神経外科)

persisten primitive artery の中でも頻度の低いとされる proatlantal artery 遺残症例の1例を経験し、本動脈の血管写所見を中心に報告した。症例は、痙攣発作を主訴とした20歳女性で、右頸動脈撮影にて外頸動脈より出て椎骨動脈に吻合する異常血管を認めた。axial view で本動脈吻合後の椎骨動脈は、大後頭孔の後外側より頭蓋内へ入り、proatlantal artery 遺残症例と診断された。尚、本例は duplicate origin を合併していた。proatlantal artery の診断上、特に重要なことは内頸動脈起始の本血管と hypoglossal artery の鑑別にある。その鑑別には、異常血管が大後頭孔のどの部位を通るかをすることが重要であり、特に axial view 撮影が有用であることを hypoglossal artery 自経例と対比しつつ述べた。

7. 排膿術後、被膜内外に出血をおこした脳膿瘍の1例

○若松弘一, 石黒修三, 木村 明
宗本 滋, 大日方千春, 上野 恵
(石川県中央病院脳神経外科)

症例は33才男性で、既往歴としてファロー四徴症がある。昭和61年6月1日にけいれん発作があり、次第に頭痛と言語理解不良を認めるようになり、6月5日

に当科入院した。神経学的所見として感覚性失語症があった。CT では左側頭葉にリング状にエンハンスされる脳膿瘍の所見があり、抗生物質にて治療していたが、徐々に悪化したため6月16日に左側頭穿頭、排膿術を施行し、ドレーンを留置した。術後経過は良好だったが、6月18日に突然意識レベルが悪化し、CT にて被膜内外に出血があった。直ちに被膜内血腫除去術を行ない経過良好で退院した。出血の原因として、ドレーンによる被膜穿破と、被膜からの自然出血の2つが考えられた。

8. 耳性感染による小脳膿瘍の1例

○妻沼 到, 寺林 征, 山中竜也
新井田広仁, 杉山義昭
(富山県立中央病院脳神経外科)

遷延する慢性中耳炎に続発した小脳膿瘍の1例を報告し、最近の脳膿瘍の傾向と治療方針につき若干の考察を加えた。

症例は28才男性。発熱・小脳症状に引き続いて意識障害を来し、アシクロビル投与により意識障害は改善したが小脳症状は改善せず、精査により小脳膿瘍と診断し、穿刺排膿術を施行して治癒した。

最近、臓器移植患者に対する免疫抑制療法や、後天性免疫不全症候群などによる細胞性免疫不全が脳膿瘍の原因として増えつつある。外科的治療法としては穿刺排膿術の方が被膜外摘出術より有用とされる傾向にある。抗ウイルス剤であるアシクロビルが、脳浮腫軽減あるいは意識障害改善作用を有する可能性があると考えられた。

9. 頭蓋内悪性黒色腫の1例

○倉内 学, 飯塚秀明, 山本信孝
中村 強, 郭 隆輝, 角家 暁
(金沢医科大学脳神経外科)

75歳男性。左側の同名半盲、運動知覚障害で発症。CT では右後頭葉表面に浮腫を伴う不整形のやや高吸収域を示す腫瘍で、均一に増強された。MR では画像上脳実質とほぼ等信号であったが、対側半球に比し、T1, T2 が僅かに短縮していた。発症後3カ月で手術。腫瘍は黒色で軟膜下にあり境界鮮明であった。組織所見は悪性黒色腫であった。術後全身他臓器を検索したが黒色腫は認めず、神経脱落症状なしに退院した。術後8カ月で局所再発を認め再手術した。再発時のGd-DTPA によるMR ではT1強調画像において腫瘍は増強された。

本例では腫瘍が脳軟膜下に存在し、他臓器に異常なく、臨床経過からも脳原発の悪性黒色腫と思われる。

MR での T1, T2 の短縮は黒色腫の鑑別診断上有用な所見と考えられる。

10. 頭蓋内転移を来した悪性黒色腫の1例

○木多真也, 宮森正郎, 水腰英隆
山野清俊 (富山市民病院脳神経外科)
山本英樹 (山本内科医院)
松本真一 (富山市民病院皮膚科)
太田真人 (同 形成外科)
高柳尹立 (同 研究検査部)

極めて稀な疾患である amelanotic melanoma の頭蓋内転移症例を経験したので報告する。症例は67才男性。'80年3月、右踵部にしこり出現、難治性のため、'81年3月皮膚科で同部を広汎切除。組織診断は amelanotic melanoma で、本報8例目であった。

以後、抗腫瘍剤投与にて5年間、再発や転移の徴候がなかった。'86年12月に記憶力障害・左不全麻痺を認め当科受診。CT スキャンでは右前頭葉に腫瘍があり、全摘出術を行った。組織診断は両者とも、pigmented melanoma であった。患者は術後40日目に両側前頭葉に再発を来し、95日目に死亡した。

amelanotic type の予後は pigmented type より悪いとされているが、本例は原発巣切除後5年間健常であったこと、また、転移巣の組織型が通常とは逆に amelanotic type より pigmented type に転換した事などから、極めて特異な症例と考えられた。

11. 頭蓋骨に転移した肝細胞癌の1例

○梅森 強, 富子達史
(高岡市民病院脳神経外科)
竹越国夫 (同 内科)
加藤 甲 (金沢医科大学脳神経外科)
野田 誠, 北川正信 (富山医科薬科大学病理)

症例は56歳男性。内科で肝細胞癌と診断された頃より頭重感、右後頭部にコブを自覚し徐々に増大。10ヶ月後、当科に紹介された。腫瘍は半球状に膨隆し、大きさは12×10×5cmで弾性軟、神経学的に異常なし。頭蓋単純写で右後頭部に骨欠損像、CT スキャンで高吸収域腫瘍が骨欠損部内外に存在し均一な増強効果があり、頸動脈写で腫瘍陰影を認めた。1ヶ月後に死亡。剖検所見で腫瘍は頭蓋骨を5×4cmの範囲で破壊せしめ硬膜に癒着していたが脳実質、硬膜への浸潤は認めなかった。その他、両側肺、第5腰椎にも転移を認めた。肝細胞癌の頭蓋骨転移はまれであり、文献的考察を加え報告した。

12. 登山と脳・神経

○水腰英隆, 木多真也, 宮森正郎
山野清俊 (富山市民病院脳神経外科)

登山医学を考えると, 低酸素・寒冷・運動負荷・自然環境の変化等が身体におよぼす障害と, これらに対する順応 (高所順化) が重要なポイントとなる。

登山が脳・神経系にあたえる障害を列記すると, 急性高山病 (自律神経症状)・高所脳浮腫・高所網膜出血 (高所網膜症)・高所肺水腫・脳血管障害・外傷・周期性呼吸 (チェーン・ストークス型呼吸) に分類する。今回は, 高所脳浮腫 2 例, 高所網膜出血 (眼底出血) 3 例, 高所肺水腫 3 例を供覧する。

発生機序, 病態生理については, 不明な点が多いが, 低酸素による生体各組織の生理的応答と, それに続発する病的反応と考えている。予防法は高所順化, 治療法は酸素吸入や薬物投与よりも「迅速な下降」と極言し得る。

13. 動眼神経鞘腫の 1 例

○久保田鉄也, 河野寛一, 久保田紀彦
林 実 (福井医科大学脳神経外科)

動眼神経より単独に発生した神経鞘腫を経験したので報告する。

52 歳の女性, 主訴は左眼瞼下垂, 複視が初発症状で, 2 カ月後に眼瞼下垂を来した。軽度の左瞳孔散大, 左眼球の上転, 下転, 内転運動の障害を認めた。レックリングハウゼン氏病の合併は認めなかった。

頭部単純写真で左上眼窩裂の拡大が見られた。CT にて左海綿静脈洞部に低吸収域があり, 造影剤にて増強されなかった。MRI では, T1 で低輝度, T2 で高輝度の homogeneous な像が得られた。左前頭側頭開頭に腫瘍の摘出を行った。肉眼的に動眼神経の腫脹, 海綿静脈洞内の嚢胞が見られた。組織学的には, 嚢胞壁は神経鞘腫であった。

14. 動眼神経麻痺で発症した三叉神経鞘腫の 1 例

○大橋雅之, 山本信孝
(市立砺波総合病院脳神経外科)

症例 19 才女性, 3 年前から進行する眼瞼下垂と複視で発症。神経学的には左動眼神経不全麻痺のみ認めた。CT では, 左錐体に接して多房性の低吸収域をみとめ, 嚢胞状に造影増強された。左頸動脈写では, 左中頭蓋窩の髄外腫瘍の所見で, 腫瘍陰影は認めなかった。Ganglion type の三叉神経鞘腫の術前診断で zygomatic-fronto-temporal approach にて手術を行なった。腫瘍は中頭蓋窩硬膜下より発生し, carotid cistern, interpuncular cistern へ進展しており, ここで動眼神経を圧迫したものと思われる。組織学的に

は神経鞘腫だった。術後動眼神経麻痺は完全となったが 3 カ月後にはほぼ改善した。三叉神経鞘腫が動眼神経麻痺で発症することはまれであり, 報告した。

15. 聴神経鞘腫の手術成績

○柏原謙悟, 藤沢博亮, 早瀬秀男
二見一也, 山嶋哲盛, 伊藤治英
山本信二郎 (金沢大学医学部脳神経外科)

1964 年以降 23 年 8 カ月間に経験した聴神経鞘腫 71 例, 80 回の手術成績につき検討した。1974 年までの肉眼手術は坐位で行われ, 死亡は 7 例, ADL 不良が 3 例であった。1976 年までの顕微鏡手術初期の 7 回の手術では死亡が 1 例で ADL 不良は 1 例であった。CT 出現後, 1977 年以降の 36 例, 42 回の手術は Nap 体位で行われ, 死亡例はなく, ADL 不良は 2 例であった。90% 以上の摘出例は 62% で, 閉眼困難な顔面神経麻痺例は 36% であった。最近 1 年の 8 例中 7 例でほぼ全摘が可能であり, 4 例で聴力が保存され, 閉眼困難な顔面神経麻痺例は 1 例であった。手術成績の向上には microsurgery の進歩, 手術体位の改善, 早期発見, CT スキャン, MRI の出現等が貢献している。

16. 頭蓋内原発悪性リンパ腫

—母子 2 例—

○池田正人, 石倉 彰, 圓角文英
(国立金沢病院脳神経外科)

症例 1 76 才女性, 抑鬱, 夜間せん妄を主訴として, 当院神経科入院。CTscan にて, 小脳虫部及び, 左後頭葉にほぼ均一に増強される腫瘍を認めた。後頭蓋下開頭で腫瘍を部分摘出, 病理所見は, 悪性リンパ腫であった。術後, 照射 (40 Gy) により腫瘍は CTscan 上完全に消失した。

症例 2 51 才男性, 抑鬱, 人格変化を主訴として, 東京慈恵医大精神科入院。CTscan にて, 左前頭葉に, 均一に増強される腫瘍を認め, 手術施行。病理所見は, 悪性リンパ腫であった。術後照射 (50.4 Gy) により腫瘍は消失した。

症例 1 と 2 は, 母子関係にあり, ともに, 頭蓋内原発悪性リンパ腫であり, 極めてまれな症例と思われる。

17. 第 III 脳室海綿状血管腫の 1 例

○勝村浩敏, 佐藤一史, 久保田紀彦
林 実 (福井医科大学脳神経外科)

腫瘍内出血で発症したと考えられる稀な第 III 脳室海綿状血管腫の 1 例を報告する。

67 才, 女性。数年前より記憶障害が徐々に進行。昭和 62 年 5 月 31 日突然の頭痛, 意識障害が出現し当科

入院. plain CT で第III脳室後半部に高吸収を示す径2 cmの腫瘍陰形を認め、造影剤で著明に増強された。また脳室系全般の拡大を伴っていた。MRIで腫瘍はT₁強調でiso~high intensity, T₂強調でhigh intensityを示し、ガドリニウム-DTPAにより著しい増強効果を認めた。6月9日右前頭開頭Monro孔經由で腫瘍を全摘出した。組織は新旧の出血を伴った海綿海綿状血管腫であった。

18. 巨大プロラクチノーマの治療について

○浜田秀剛, 黒田英一, 伊藤治英

立花 修, 山本信二郎

(金沢大学医学部脳神経外科)

久保田紀彦(福井医科大学脳神経外科)

プロラクチノーマの内第3脳室底に達するもの、または著明な側方伸展を呈するものを巨大プロラクチノーマとして、その治療法につき検討した。1980年から1987年の間に7例の巨大プロラクチノーマを経験した。4例は術前のプロモクリプチン投与はなく、開頭術が行われたが、視力視野障害の改善は不良であった。他の3例は術前にプロモクリプチンを投与し、経鼻手術が行われ3例とも視力視野は改善した。以上の経験から巨大プロラクチノーマに対しては、術前に2~4週間プロモクリプチン投与後、経鼻手術を先行し、術後もプロモクリプチンを継続しても、著明な側方伸展を残した症例では開頭術による追加切除を考慮する。

第12会場 産科婦人科分科会

一般演題

1. ラット乳腺腫瘍に関する内分泌学的研究

○富松功光, 福岡哲二, 朝野加奈子

寺田 督, (金大産婦人科)

卵巣摘除Wistar系ラットでDMBA局所投与という新しい方法を使用して乳腺腫瘍発生率とその組織型について、さらに副腎性アンドロゲンであるDehydroepiandrosterone (DHA)が腫瘍発生率、発育、組織型に及ぼす影響およびその際の内分泌環境についても検討した。その結果、DMBAを、2mg乳腺局所に投与するという新しい方法により少量で(経口投与の約10分の1)乳腺腫瘍を高率に発生させることができた。しかし、他の方法と比較して乳癌(腺癌)の割合が少なく肉腫が多かった。そして、DHAは肉腫の発現遅延を認めた。組織学的特徴として、光顕および電顕所見により、副腎性アンドロゲンであるDHAは、肉腫においては、腫瘍細胞の配列に影響を及ぼし、多角巨細胞の出現を促すことが、乳癌においては、そ

の細胞分化を促進することがそれぞれ示唆された。

2. ラット乳腺組織の電顕的研究

○鈴木信孝, 真野達夫, 窪田興志

杉田直道, 寺田 督(金大産婦人科)

乳腺の脂肪滴形成過程は未だ不明点が多い。今回、DHA (Dehydroepiandrosterone)投与による脂肪滴の形成に関して興味ある知見が得られたので報告した。生後50日齢のWistar系雌ラットを去勢し60日齢よりDHA acetate 5mg/100gを皮下投与した(3回/週)。1, 3, 7, 14, 28回投与後屠殺し観察した。投与1回では上皮内に脂肪滴がみられたが、蛋白顆粒はみられなく、3回投与では著明に脂肪滴、蛋白顆粒がみられ、7回投与で両分泌物の数はピークに達し、14, 28回投与になるにつれ、両分泌物の数は低下した。脂肪滴と蛋白顆粒の形成は、同一の場で行われていることが多く、その場合、形成の場となるべきところにポリゾームが渦状に集合し、その周囲を粗面小胞体が数層取り囲み、粗面小胞体の最内側に接してミトコンドリアが存在している像がみられた。以上から脂肪滴形成には粗面小胞体、ミトコンドリアが深く関与していることが示唆された。

3. 雌ラットにおける副腎性 Androgen の動態について

○村上弘一, 上野浩久, 中川俊信

佐藤栄一, 山城 玄(金大産婦人科)

副腎性アンドロゲンの主体であるDehydroepiandrosterone (DHA)の雌ラットにおける血中動態を検討した。〔方法〕1. 日令変化は10日令より10日間隔にて100日令までのラットを午前9時に断頭採血した。性周期のある日令ではD1の午前9時に採血した。2. 性周期変化は、経時的に断頭採血した。卵巣及び副腎重量を測定し、ホルモンはRIA法にて測定した。また、DHAの測定法の基礎的検討も行なった。〔結果〕血中DHA濃度は、50日令までは0.2ng/ml前後で一定していたが、60日令以降上昇し0.3~0.4ng/mlで推移した。性周期において、Proestrusの午後基礎値の約2倍を示したあとEstrusの朝には低下した。血中DHA濃度は、卵巣摘除によりほぼ測定感度以下となった。〔結論〕雌ラットにおける血中DHAの動態は、卵巣重量とほぼ相関し、性周期における卵巣機能とも密接な関係がみられることより、卵巣が主にDHAを分泌しているものと思われた。

4. N.S.T.が有用だった臍帯過捻転症例

○木原順子, 三輪正彦, 橋本 茂

山田光興

(辰口芳珠記念病院産婦人科, 金大産婦人科)

今日 Non stress test の有用性は広く認識されているが、当院で最近経験した臍帯過捻転の症例において、N.S.T.所見が、診断及び帝切時期決定に極めて有用であったので、報告する。

症例は19才の健康な初産婦で、中期までは順調な経過であった。満28週を過ぎる頃から子宮内胎児発育遅延が認められたので、満35週から入院の上、種々検査、治療を行なった。入院当初より、N.S.T.は acceleration を殆ど認めない non reactive pattern を示し、尿 E₃ も低値であった。N.S.T.を繰り返していたところ、やがて deceleration が散発するようになり、満37週に到って severe variable deceleration が出現したので、この時点で緊急帝切を施行した。児は2410gの男児で、Apgar score 8点、臍帯過捻転が認められた。

5. 子宮内胎児死亡と Hygroma

○吉田勝彦, 金子利明, 高木弘明
高林晴夫, 杉浦幸一, 桑原惣隆
(金沢医科大学産婦人科)

妊娠経過中さまざまな原因にて子宮内胎児死亡する例があるが、我々の施設で経験した子宮内胎児死亡例の中で Hygroma を合併するものがあり、それが死因となる可能性を強く示唆する例が認められたので報告する。

今回の5例の Hygroma はいずれも妊娠19週から24週頃に子宮内胎児死亡をきたし、性別では女児が4例男児が1例と女児に多い傾向が認められた。形成部位は主に頸部である。2例を除き明らかな異常所見のない他の3例では Hygroma が死因となる可能性を想定させた。

本症は超音波断層診断で比較的容易に診断ができ、追跡できるもので、早期診断はさほど困難ではない。死因としては、頸部や胸郭中隔内大血管、気道、食道などの圧迫による循環障害、羊水嚥下作用などの障害が考えられる。胎児治療として、超音波ガイド下の穿刺排液などは、試みる価値があると考えられる。

6. 妊娠中に急性 B 型肝炎を発症した1症例

○山崎 洋, 杉山裕子, 原田文典
荒木克己, 山田光興
(公立羽咋病院産婦人科, 金大産婦人科)

妊娠中の黄疸は稀とされているが、今回妊娠初期に急性 B 型肝炎に罹患し、児への垂直感染もなく治癒した症例を経験したので報告する。

症例は28才の1経産婦。昭和60年8月12日より5

日間を最終月経として無月経となり、近医で妊娠6週と診断され、その際 HBs 抗原陰性であった。全身倦怠、皮膚掻痒症、尿濃縮などを主訴として12月10日(妊娠16週)当院受診した。初診時、眼球結膜に中等度の黄疸を認めた。検査所見では MG70、総ビリルビン 5.7 mg/dl, GOT 966, GPT 1151 と上昇、HBs 抗原及び HBe 抗原は陽性、HBc (IgM) 抗体陽性であった。入院の上種々の肝庇護療法の結果、妊娠20週にて肝機能は正常化し、妊娠34週で HBs 抗原は陰性化した。妊娠39週で経膈分娩したが、児に異常はなく、臍帯血及びその後の血液検査でも HBs 抗原、抗体は陰性であった。

7. 当科における過去10年間における帝切に対する統計的検討

○岩脇俊也, 加藤三典, 高橋義弘
大森正弘, 飯田和質
(福井県立病院産婦人科, 金大産婦人科)

S52~61年迄の過去10年間に当科に入院し分娩した妊娠24週以降の産婦7860例のうち帝切施行例は389例であった。S55~60年に帝切率7%前後、再帝切率50~70%と共に高率を示したが、S61年は4%、35%と急減した。S52年よりS61年にかけて帝切患者は順次高令化傾向を示した。高年初産帝切者は10年間に実数変化はあまり認めなかったが、30歳未満の帝切初産婦増加がS57~59年の帝切数上昇の一因となっていた。CPD、前回帝切、妊娠中毒症、胎児切迫仮死、骨盤位が適応として10年間合計数では多いが、皆減少傾向にあり、胎盤機能不全、微弱陣痛が増加傾向にある。死産は早産、臍帯脱出が因であった。S57~60年は新生児異常が多かった。S61年は早期産帝切例が多かったが新生児異常は少なかった。陣痛発来前の帝切例では、0~499mlの出血量が最多であった。S54以前は腰麻、S55年からは硬膜麻が最多であった。麻酔科の協力の下、緊急時の全麻例も増加傾向にある。

8. 血液型キメラの1例

○井川一正, 石川 宏, 藤田 克
(高岡市民病院産婦人科, 金大産婦人科)

13才女子、第2子として正常に出生、双生児でない。特別な既往歴、輸血歴等はない。卵巢腫瘍の疑いで来院。血液型検査の際に、表試験 A 型、裏試験 AB 型の不一致が見出され、精査したところ、患者の赤血球は92%が A 型であり、8%が B 型赤血球であった。尿中での血液型合成酵素の活性は B 型が圧倒的に強く、唾液は分泌型で弱い A 抗原と通常の B 型、H 型抗原が

認められ、毛髪はB型(10/10)であった。末梢白血球の核型は、normal, 46XX(20/100)とnormal, 46XY(90/100)のモザイクを示した。摘出された卵巣腫瘍は未分化胚細胞腫であったが、腫瘍細胞、及び卵管粘膜上皮は共に抗Aモノクローナル抗体によって免疫染色されたが、抗B抗体によっては染色されなかった。本例は本邦で始めて見つかったdespermic chimeraの1例である。

9. 3回の妊娠期間中にacute hydronephrosis (AH)症状を反復して示した1例

○生水真紀夫, 岩脇俊也, 高橋義弘
飯田和實
(福井県立病院産婦人科, 金大産婦人科)

妊娠中に尿管が拡張することはよく知られているが、側腹部痛などの症状を呈する例は比較的少いとされている。われわれは、3回の妊娠期間中にacute hydronephrosis症状を反復して示した1例を経験したので報告した。

患者は30歳の3経産婦人(152cm, 52kg)である。25歳のとき第1子(3280g, 男児)を妊娠分娩した。この際、妊娠29週頃より右側腹部鈍痛が出現し次第に増悪した。妊娠31週のととき嘔気を伴う激痛を訴え、超音波検査(US)によりAHと診断した。分娩後尿管拡張は消失した。28歳のとき第2子(3178g, 男児)を妊娠分娩したが、妊娠29週より同様の疼痛が出現し分娩まで持続した。USによりAHと診断された。さらに、30歳で第3子を妊娠した。妊娠14週で右腎はごく軽度の拡張を示していたが、23週以降拡張が著明となった。妊娠27週頃より右側腹部鈍痛が出現し、次第に増悪した。妊娠31週で、疼痛強度となり入院加療を行った。USによりAHと診断された。

10. 妊娠末期に風疹罹患後血小板減少性紫斑病を発症した1例について

○中嶋 優, 道倉康仁, 細野 泰
千鳥哲也
(富山市民病院産婦人科, 金大産婦人科)

症例は32歳。6年前に長男を正常分娩。今回、妊娠10週には風疹抗体価8倍以下、血小板数 $29.4 \times 10^4/\mu\text{l}$ と正常値で、昭和62年6月26日を分娩予定日として外来で経過をみていた。長男が風疹に罹患、約2週間後本人にも発疹出現、発疹増悪と易出血性を訴え妊娠36週4日に来院した時、血小板数は $0.1 \times 10^4/\mu\text{l}$ と著しく減少、風疹抗体価128倍であった。入院の上、プレドニゾロン内服60mg 4日間、30mg 1日間及び乾燥スル化人免疫グロブリン静注20g 5日間投与し

た所、 $7.8 \times 10^4/\mu\text{l}$ にまで増加し妊娠中毒症も軽快したため陣痛抑制剤中止し分娩誘発した結果、翌日6月12日妊娠38週に女児2928gを無事経膈分娩した。新生児はNICUで管理されたが血小板数正常、経過良好で7月2日母親の血小板数 $28.9 \times 10^4/\mu\text{l}$ となり母子共に退院した。輸血は一切行わなかった。現在までの所再減少を認めていない。

11. 当院における新生児外科症例の検討

—特にNICUとの関連について—

○宮本正俊, 小沼邦男, 森尻悠一郎
高田伊久郎(富山市民病院小児外科, 小児科)

当院小児外科開設以来、新生児入院患者は155名であり、そのうち99例に手術を施行した。

鎖肛は20例で、高位・中間位が13例、低位が7例となり、食道閉鎖や心・腎奇形、椎体奇形などの合併が認められた。腸閉塞疾患では、十二指腸・小腸閉鎖症が14例、腸回転異常9例、卵黄腸管遺残4例、ヒルシュスプルング病6例(人工肛門2例)であった。食道閉鎖症7例中3例が生存しているが、4例は術後肺炎や気管食道瘻再開通及び重症心奇形で失った。臍帯ヘルニア8例のうち1例は出生前診断しながら、イレウスと腹膜炎で死亡した。横隔膜ヘルニア9例中3例が出生直後から呼吸困難に陥っており、8例すべて生後4時間以内に根治術を行ったにもかかわらず、術後PFCや心奇形などにより救命できなかった。

S58年10月、NICUが開設されて以来、以前と比べて、生後2日以内の入院数は飛躍的に増加した。したがって手術的治療も早く行えるようになり、術後の合併症も少なくなったが、半面、横隔膜ヘルニアなどの重症例も多くなり救命率は向上していない。今後これらの症例に対する治療方法の進歩がのぞまれる。

12. 過去20年間における当院の先天異常児出生に関する統計的観察

○大口昭英, 館野政也, 中野 隆
南 幹雄, 村田雅文
(富山県立中央病院産婦人科)

1. 昭和42年から昭和61年までの20年間の奇形児出生頻度は1.22%であり、また、各年の奇形児出生頻度は0.52~2.78%であった。

2. 奇形児の中で死産と早期新生児死亡児の占める率は25.5%であった。また、奇形児の中で低体重児の占める率は20.3%であった。当院の低体重児出生率は7.81%で、奇形児の場合には低体重児が高率で見られた。

3. 昭和55年から昭和61年までの最近7年間に生

まれた奇形児は、8症例すべてIUGR児であった。

4. 奇形児の種類別発生順位は、口唇裂・口蓋裂（出生1万対21.6）、手足の多指症（出生1万対18.4）、無脳児（出生1万対10.8）、先天性心疾患、染色体異常、内反足、外反足（いずれも出生1万対9.6）の順であった。

5. 20年間で計10例以上発生した奇形について、10年間で区切り、各々の期間内での発生率を比較してみたところ、多少の変動はあるものの両者間に有意の差はみられなかった。

13. 無事、妊娠分娩を終了した sarcoidosis の1例

○佐竹紳一郎、館野政也、丘村 誠
舟本 寛（富山県立中央病院産婦人科）

sarcoidosis は多臓器を侵す肉芽腫性疾患であり、厚生省特定疾患にも指定されているが、胸部X線で診断しやすいことや、臓器特異性から病変の主座が肺にあることが多く、慢性の呼吸器疾患として扱われることが一般的である。しかし一方、患者の6割近くが20～30才台であり、女性に多いことから妊娠との関係が問題とされるのは当然で、産科領域でも決して無視できない疾患であるといえる。

今回我々は、以前 sarcoidosis の診断を受け、Steroid療法により軽快の後、経過観察中に妊娠、特に再発・増悪をみることなく無事、分娩を終えることが出来た1例を経験した。

sarcoidosis は分娩・中絶の後に再発・増悪をみることが多く、その予後は妊娠前の病型に左右される傾向にあると報告されている。すなわち、sarcoidosis 合併妊娠の管理においては、妊娠前の病状を正確に把握し、常に再発・増悪に注意しながら経過を観察することが重要であるといえる。

14. 卵管切除後に発生した同側卵管間質部妊娠の1例

○矢後 均、栗林実世治、伊藤達也
大沢 汎

（厚生連高岡病院産婦人科、金大産婦人科）

産婦人科の日常臨床に際して子宮外妊娠の存在は、常に念頭に置かなければならない問題である。特に卵管間質部妊娠はまれで全卵管妊娠の2.5%を占めるにすぎない。卵管切除後に発生した同側卵管間質部妊娠の頻度はさらに低い。今回我々は、卵管膨大部妊娠で卵管切除術を施行された患者において発生した同側卵管間質部妊娠の1例を経験したので報告した。

症例は32歳の主婦で昭和61年1月左卵管膨大部妊娠にて左卵管切除術を施行されている。最終月経が昭和61年7月14日より5日間で、9月9日不全流産の

診断にて子宮内を掻爬するに絨毛を採取し得ず、ダグラス窩穿刺を施行するも陰性であった。9月12日下腹部痛、嘔気、性器出血を訴えて緊急入院、ダグラス窩穿刺陽性にて子宮外妊娠と診断、緊急開腹、腹腔内に約250mlの出血を認め左子宮角部は腫張し破裂していた。子宮角切除術を施行、組織学的にも絨毛及びトロホプラストを認め卵管間質部妊娠が確認された。

15. 右卵巢囊腫摘出後発症した潰瘍性大腸炎の1例

○小浜隆文、松田和則、松田春悦
（市立敦賀病院産婦人科、金大産婦人科）

症例は37才の女性。今年4月中旬、下腹痛にて当科受診、USGにて卵巢囊腫p.o. 5月1日当科にて右卵巢囊腫摘出、左卵巢楔状切除、虫垂切除施行。術後2日目より粘血便を認め、臭化ブチルスコポラミン投与、軽減するも再び同症状を認めたため当院外科受診、注腸造影にて鉛管状の硬化と内腔の狭窄、また大腸内視鏡にて結腸ヒダの消失、多発性潰瘍、易出血性を認め潰瘍性大腸炎と診断。サラゾピリン、プレドニゾロンを4週間内服粘血便はもとより大腸内視鏡での出血、潰瘍等の所見を一切認めなくなり退院した。

潰瘍性大腸炎は、難治性のものが多く、長年にわたって再発と寛解をくり返す場合も多いため、産科的、婦人科的手術の後での反復性の下痢、血便を認めた際は、常に本疾患も念頭に入れて精査する必要があると思われる。

16. 外来における腔トリコモナス症、腔カンジダ症、クラミジア頸管炎の臨床的考察

○高橋義弘、加藤三典、生水真紀夫
大森正弘、飯田和實
（福井県立病院産婦人科、金大産婦人科）

産婦人外来でよくみられる性行為感染症について臨床的考察を行ったので報告する。

1. 腔トリコモナス症、腔カンジダ症

腔カンジダ症は漸増傾向にあり、患者年齢は20才台に多く、妊娠との合併も約40%認められた。腔トリコモナス症は漸減傾向にあった。腔カンジダ症では難治例、再発例が各々約10%あり、治療面で今後の課題と考えられた。

2. クラミジア頸管炎（尿道炎）

クラミジア培養陽性率は、無症状症例を対象とした当科での検査では約5%であった。一方、有症状症例を対象とした本院泌尿器科での検査では約20%と高率であった。対象を妊婦に広め、産道感染、早産などとの関連を今後検討してゆく予定である。

17. 子宮摘除婦人における遺残卵巣の機能と術後愁訴との関係

○丹後正紘, 川原領一, 松山 毅

長柄一夫, 岡部三郎 (国立金沢病院産婦人科)

卵巣を温存しても子宮全摘術後に更年期障害様の症状を訴える例があり, これは手術による血流障害にもとづく卵巣機能の低下によるものか, 心理的なものなのかは, 治療する上で重要である. 子宮筋腫で子宮全摘した218例について1年間 follow up し, 遺残卵巣の機能 (E_2 値) と術後愁訴との関係を検討した. 腹式子宮全摘術 (AH) 又は腔式子宮全摘術 (VH) に両側付属器摘出術 (BSO) をおこなった群では卵巣欠落症状が38例中25例 (65.8%), AH 又は VH に一側付属器摘出した群では46例中16例 (34.8%), AH 又は VH のみの群では134例中16例 (11.9%) に認められた. 症状発現期は早いもので術後1週間目, 遅いもので1年後とばらつきがあり, 平均5.8ヶ月であった. 付属器を温存しても E_2 値が10 pg/ml 以下に低下した例が, AH 群では78例中4例 (5.1%), VH 群では56例中3例 (5.3%) にみられた. hot flush 発症時の E_2 値は必ずしも全例低下しているとは限らなかった.

18. 存続性絨毛症の1例

○細川久美子, 久住健一, 井上修司

福田直孝, 根上 晃, 経沢 弥

麻生武志, 富永敏明 (福井医科大産婦人科)

絨毛性疾患は近年著しく治療成績が向上している. 私達は, 胎状奇胎後3年近く経て発症した転移性絨毛癌の1例を経験し, 化学療法により, 現在小康状態を保っているので報告する.

症例は28歳で, S 59, 5月, 胎状奇胎となり, 子宮内容除去術後1年間 follow up をうけ異常なかった. S 62. 2月, 急激な呼吸困難をきたし内科入院. X 線上肺野に腫瘍陰影が複数みられ, hCG 高値により絨毛性疾患にて当科紹介入院となる. 子宮原発巣は確認できず, MTX, Act-D, CPM の3剤併用化学療法を開始. hCG は尿中及び血中とも速やかに減少するも, 肺転移巣には著変なく Etoposide 単独療法に切りかえる. 現在までに3クール行い, 肺転移巣は減少, 及び縮小してきており, 経過は良好である.

この症例を通じ, 私達は改めて胎状奇胎後の絨毛癌発生予防管理の重要性を認識させられた. 今後も, 長期管理に努めていきたい.

19. HMG-HCG 療法による卵巣過剰刺激症候群の3例

○矢後 均, 栗林実世治, 伊藤達也

大沢 汎, 石多 茂

(厚生連高岡病院産婦人科, 金大産婦人科)

症例1は34歳の1妊1産婦で, HMG 75単位/日を8日間, HCG 5,000単位を1回投与され, 卵巣腫大が臍上まで達し腹水の貯留も認めるようになったが, 循環血液量の増加, 低蛋白血症の改善を目的としてアミノ酸輸液, アルブミン製剤を投与し, また電解質輸液とともに利尿剤で利尿を図り, 保存療法で軽快した症例で妊娠は成立しなかった.

症例2は23歳の未妊婦で, HMG 75単位/日を7日間, HCG 5,000単位を3日間投与され, 卵巣破裂のため急性腹症をきたし開腹手術を要した症例で, 手術は健常部位を残し, 両側卵巣とも楔状切除術を施行, 術後3胎であることが判明したが不幸にして妊娠25週で早産の転帰をとった.

症例3は26歳のHMG 150単位/日を21日間, HCG 5,000単位を1回投与されて妊娠した妊娠9週の初妊婦で, 双胎の1児胎内死亡を伴い, 超手拳大に腫大した右卵巣の茎捻転のため急性腹症をきたし開腹手術を要した症例で, 手術は右付属器摘出術を施行, 妊娠38週で2634gの男児を無事経膈分娩した.

3症例とも他院でHMG-HCGを投与された症例であった.

20. 中高年女性の血中各種ホルモン変動パターン分析

○林 恵子, 打出喜義, 久保 忠

富田嘉昌

(北陸中央病院産婦人科, 金大産婦人科)

閉経後女性196名を対象として, 各種血中ホルモン値を求め, その変動パターンを検討した. 採血は午前10~11時に, 肘静脈より行なわれ, 血中 LH, FSH, prolactin (PRL), estradiol (E_2), testosterone (T) 値をRIA法により測定した. 各ホルモン値の変化について, 閉経後経過年数 (0~18年) を基準として, それぞれの回帰直線を求め比較検討した. LH, PRL, E_2 , T は, 閉経後経過年数とともに漸時低下した. とくに E_2 は閉経後1年以内に全例が50 pg/ml 以下となり顕著であった. しかし FSH は, 閉経後も長期にわたり高値が保たれていた. 血中 LH と FSH の回帰直線による, 加齢の変動パターンの違いは, FSH が LH とは異なる分泌機序を有することを裏付けるものと思われた.

21. 子宮内膜症の診断と治療

(症例を中心に)

○高邑昌輔, 瀬戸俊夫, 由田 譲

本保喜康 (国立金沢病院産婦人科)

子宮内膜症は、婦人科では common な疾患で腹腔鏡の繁用により、ハイテンの世代でも稀でないことが明らかとなっている。しかし一般診療においては、初期病変は問診や内診で推定し、ダナゾールが著効すれば内膜症と臨床的に診断される。これに対し進行例では鑑別診断が困難なため開腹手術が優先される。そして挙児希望例には保存手術を、希望しない例には根治手術 (病巣を子宮および両側付属器と共に切除) か、比較的根治手術 (病巣を子宮と共に切除するが、健全な卵巣組織は残置する) が行われる。前者は、術後に膣の萎縮をきたし、卵巣欠落症状もおこるが、再発は殆んどない。後者は、膣は正常に保てるが、再発の可能性がある。しかし術後にダナゾール療法を加えれば再発の防止や再発の治療に有効なので最近では比較的根治手術の頻度が高くなる傾向にある。治療後は定期的に、少くとも5年間は管理し、再発の予防や治療に備える。

22. 低カロリー食事療法時における肥満女性の血中ホルモン値について

○山西久美子, 中嶋正則, 原田丈典
荒木克己

(富山通信病院産婦人科, 金大産婦人科)

高度肥満者2例の月経異常 (無月経) に対し、減食療法をこころみた。

1例は、24才、主婦、166.6 cm, 111 kg, Broca 指数+66.7%, 2,200 cal → 800 cal の肥満食を与え、4カ月で、89.0 kg まで減量した。この間、r-GTP 64 → 9 IU/l, GOT 67 → 20 IU/l, GPT 113 → 24 IU/l, CPK 98 → 77 IU/l, LAP 82 → 54 IU/l, ALD 14.1 → 4.1 IU/l, と正常化し、75 g GTT パターンは、入院当初、糖尿病型だったが、正常型になった。LH-RH test は、入院前、入院後、3カ月後共、正常パターン。他、ACTH test, Dexamethasone-HCG test, は正常 Cortisol と PL の日内変動も異常なかった。血中 androstenedione, DHA, DHA-S は、正常範囲内の変動だった。血中 Testosterone, 尿中 17-KS, 17-OHCS は高値を持続した。減食療法にひきつづき、Clomid 療法を行っている。

2例目は、162.5 cm, 87 kg, 肝機能 75g GTT は、当初より正常。他、間脳一下垂体には異常を認めなかった。血中 androstenedione, DHA, DHA-S は正常範囲内、尿中 17-KS, 17-OHCS は高値傾向を持続していた。無排卵は漸次改善された。

23. 子宮体部癌の細胞診と電顕像の比較検討

○杉田直道, 富松功光, 川北寛志

荒谷穰治, 富田嘉昌 (金大産婦人科)

戦後の女性の生活レベルの欧米化により子宮内膜腺癌の相対的頻度は次第に上昇の傾向にあり、その検診方法の是非が問われている。中でも診断の中心は High Risk Factor を含めた臨床所見、細胞診、組織診とされる。今回、高分化型腺癌、低分化型腺癌について細胞診と組織診、特に電顕の所見をとり上げその比較をしてみた。

高分化型腺癌、低分化型腺癌の大きな相違は腺腔構造の発達の良し悪しが基本となる。従って低分化型ほど細胞の異型度は強く、腺腔様構造の消失、巨大核、核形不正、核小体増大などが認められる。電顕所見には人工的産物を判別する能力が必要となるし、また細胞診の10倍以上の標本作製時間がかかる。従って細胞診ほど routine には応用されないが、標本採取が確にされ、所見判読が正確に行われれば、病変のより深いメカニズムや細胞同定がなされるものとして広く応用されることが期待される。

第13会場 形成外科分科会

第30回 日本形成外科学会北陸地方会

1. Dual grafting of autologous epidermal cells and skin allografts on the third degree burn wounds

○Qu Miao-miao, Sadao Tsukada

(金沢医大形成)

Tang Chao-wu (北京医大形成)

Wang Liang-neng (西安第四軍医大形成熱傷)

2. Epidermal langerhans cell and allografting III. suppression of murine epidermal langerhans cell induced by UVC irradiation and its effect on skin allografting

○Qu Miao-miao, Sadao Tsukada

(金沢医大形成)

Chen Dong-ming, Liu Gang

Shi Xiu-rong, Zhu Hong-yin

(北京医大形成)

3. ヒト培養表皮の臨床応用

○石倉直敬, 白石正憲, 横山理佳

塚田貞夫 (金沢医大形成)

4. 含皮下血管網遊離全層皮膚移植

—非生着例の検討—

○囃 稀吉 (金沢市)

5. 色素レーザーによる単純性血管腫の治療

○林 洋司 (浅ノ川形成)

安田幸雄, 塚田貞夫 (金沢医大形成)

6. Malignant fibrous histiocytoma の1例

○長谷田泰男 (厚生連高岡形成)
藤田知代 (金沢医大形成)

7. 巨大な耳下腺腫の治療経験

○赤羽紀子, 吉居賢介 (富山県中形成)
桜井伴子 (金沢医大形成)

8. 唇裂鼻に対する二次修正術

○山本正樹, 荒井正雄 (福井県立形成)
中林伸之 (金沢医大形成)

9. 口内法による咬筋肥大症の治療経験

○高橋 元, 木股完二, 武田 啓
(朝日大村上形成)
塩谷信幸 (北里大形成)

10. 大胸筋皮弁による口腔底再建の2治験例

○宮永章一, 小島正嗣, 池田和隆
加田顕秀 (石川県中形成)
徳田紀久夫 (同 耳鼻)

11. 下顎前突症の治療

○川上重彦, 上野輝夫, 小屋和子
岡田忠彦, 塚田貞夫 (金沢医大形成)

12. 上・下顎同時骨切り移動術を行った顔面非対称症例

—術後の機能的変化—

○高田保之, 香林正治, 須佐美隆三
(金沢医大歯矯正)
川上重彦, 岡田忠彦, 塚田貞夫
(同 形成)

13. 不全切断指の検討

○亀井康二, 北村謙次 (砺波総合形成)

14. 手の degloving injury の1治験例

○上 茂, 吉川秀昭, 石倉直敬
北山吉明, 岡田忠彦 (金沢医大形成)

15. Radial forearm flap による手背部皮膚欠損の1治験例

○加田顕秀, 小島正嗣, 宮永章一
池田和隆 (石川県中形成)

16. 熱傷患者の代謝量測定

○中林伸之, 安田幸雄, 桜井伴子
関 時宏, 松前秀治, スグルトオイリア
塚田貞夫 (金沢医大形成熱傷センター)

第14会場 臨床病理分科会

第12回 北陸臨床病理集談会

当番幹事 小西健一 (富山医科薬科大学)

血 液

座長 斉藤和哉 (福井県立病院)

1. FDP-D dimer 分画測定試薬の基礎的検討

○小木曾昇, 岡田敏春, 市川雅彦
黒田満彦 (福井医科大学検査部)

安定化 Fb 分解産物に対して特異的に反応するモノクローナル抗体を用いたラビディア法 (富士レビオ) と D-Ditest 法 (BMY), 及び従来の FDPL 法 (帝國臓器) について検討した。各種標準品について FDPL 法では、フィブリノゲン, FDP の D 及び E 分画の全てに反応が認められ、また D-Ditest 法では FDP-D, E 標準に反応が認められたが、ラビディア法では認められなかった。また陽性コントロールを交互に測定したところ、ラビディア法用コントロールは D-Ditest 法で凝集を認めた。D-Ditest 法用コントロールは、ラビディア法で凝集を認めなかった。これは、モノクローナル抗体の反応性の違いによるものと考えられる。5 例の同一患者より得た血清と血漿の比較では、ラビディア法, D-Ditest 法いずれも同様の結果であった。また従来法との比較では、正常異常の判定に解離が認められたものはラビディア法 30 例中 2 例, D-Ditest 法 30 例中 7 例であった。今回検討した DIC 患者における経時的変化では、各法における解離を認める例はなかったが、今後症例を集めさらに検討したい。

2. 三系統の細胞に異常が認められた低形成白血病の細胞性状について

○桑原卓美, 川島猛志, 坂本純子
佐竹伊津子, 松田正毅, 小熊 豊
桜川信男 (富山医大検査部)
矢崎明彦, 峯村正美, 山崎 徹
井上恭一, 佐々木博 (同 第3内科)

我々は今回、分類困難であった白血病細胞をモノクローナル抗体を用いた金コロイド抗体法及び免疫アルカリフォスファターゼ法により同定し得たので報告する。

症例は当院第3内科入院の低形成白血病 (72 才男性)。入院時検査所見は RBC $178 \times 10^4 / \mu\text{l}$, Hb 5.5 g/dl, Hct 28.1%, Plt $12 \times 10^4 / \mu\text{l}$, WBC $2700 / \mu\text{l}$ で芽球を 7% 認めた。骨髓は N.C.C. $27,000 / \mu\text{l}$, MgK 15.6/ μl で芽球を 15.3% 認めた。芽球は従来的一般染色, 特殊染色 (per, α -NB, A-ch, PAS, Acp, α -NA) では分類困難であり、モノクローナル抗体を用いた免疫アルカリフォスファターゼ法 (東京医大川口先生に依頼・施行) 及び金コロイド抗体法を行った。その結果、芽球は骨髓芽球・巨核芽球及び赤血球系のものと同定された。特に金コロイド抗体法は手技的にも簡便であり、免疫電顕にも応用できることから今後、白血病細胞の同定に有用であると考えられた。

生 理

座長 福永寿晴 (金沢医科大)

3. $M\mu$ リズムの年齢別出現頻度の研究

浜田敏彦, 福井純一, 前川秀樹

黒田満彦 (福井医大検査部)

坪川みゆき, 越野好文 (同 神経科精神科)

目的: $M\mu$ リズムの正確な出現頻度を知るためにパターンビジョンテスト (以下 PVT) を用い $M\mu$ リズムを誘発し検討した。

対象と方法: 1983 年 11 月から 1987 年 7 月までの間に PVT が充分に行なわれた 395 名 (男 219 名, 女 176 名, 平均年齢 41.3 ± 20 才) を対象とし, 脳波は国際法 10-20 法により, 単極, 双極導出で記録した。PVT は 13 枚の風景や人物あるいは幾何学的模様などの図版や写真を次々に 10 秒間ずつ呈示するもので, 双極導出で行なった。

結果: $M\mu$ リズムは 395 名中 112 名 (28.3%) に認められた。各年代別では 0~19 才で 50% と高値を示し, その後年齢とともに減少し, 50 才以後では 14.9% であった。また, $M\mu$ リズムの出現頻度と性別, 基礎疾患, 脳波所見との間には有意な関係は認められなかった。

結論: $M\mu$ リズムの年齢特異性は 0~19 才にピークがあり, その後, 出現率は加齢とともに低下する傾向にあることが明らかとなった。

4. 過呼吸賦活における EEG Mapping

○角田美鈴, 奥田忠行, 松田正毅

小熊 豊, 桜川信男 (富山医大検査部)

村上美也子, 山谷美和, 小西 徹
(同 小児科)

目的: 小児脳波の過呼吸賦活 (HV) における賦活効果を, EEG Mapping とパワースペクトルアレイにより, その定量的解析を検討した。

対象および方法: 対象は神経症状のない小児 32 名 (7~14 才, 平均 10.8 才) である。方法は, 安静時分時喚気量 (\dot{V}_E) より算出した HV の前, 中, 後において EEG および Mapping, パワースペクトルアレイを行なった。なお使用機器は, Mapping とパワースペクトルアレイはシグナルプロセッサ 7T 18, \dot{V}_E は RM-200 である。

結果: ① EEG Mapping は, HV 前, 中, 後の周波数帯域の推移を視覚的に容易に判読でき, 更に定量的評価も可能であると思われる。

② デルタ波の優位部は HV により, frontal 部から後頭部側に, central 部は全体に移動した,

③ パワースペクトルアレイは, 周波数の連続的な変

化の定量的判読および Build up の程度の判読も可能であると思われる。

病 理

座長 三輪淳夫 (富山県立中央病院)

5. 細胞診標本作製の基礎的検討

ーとくに溶血法についてー

○石原慶子, 野崎智子, 池田実千野
今村伸一, 島崎栄一, 高柳尹立
(富山市民病院中央研究検査部)

細胞診において標本の良否は, 悪性細胞検出に大きく影響する。赤血球の多い検体には通常の溶血法を実施してきたが, 納得のいく標本を得ることは難しかった。そこで今回, 体腔液等を材料に種々の溶血法, 細胞接着法について比較検討したので報告する。

溶血剤: 1% サポニン液, スマトライザー W, クイックライザ, 酢酸, 0.9% 塩化アンモニウム液, 2 倍希釈サコマノ液。

細胞接着剤: 0.1% poly-L-lysine 水溶液, 卵白グリセリン, サコマノ液, 6% ポリエチレングリコール 95% エタノール液。

結果: 溶血力が強く, 細胞保存性にすぐれた方法を求めたところ, 検体沈渣に生食水を加え, スマトライザー W を滴下して良好な結果を得た。また, 細胞接着法としては 0.1% poly-L-lysine 水溶液 コーティングスライドの使用が望ましい。本方法は, 出血量が多くかつ悪性細胞が少数の場合の細胞診標本作製にきわめて有用と思われた。

6. アミロイド症例の検討

○富田小夜子, 川畑圭子, 川中 剛
尾崎 聡, 南比呂志, 渡辺颯七郎
(国立金沢病院研究検査科)

過去約 5 年間の当病理において経験したアミロイド症 (「A」症) 15 例 (剖検 6, 生検 9 例) のアミロイド蛋白による分類 (KMnO₄ 前処理法 (K 法), ABC 法 (抗 AA, 抗 AL- κ , 抗 AL- λ) トリプトファン反応) を試み, 合わせてアミロイド染色 (Highman, Alkaline, phenol, Dylon, Direct Fast Scarlet (DFS)) の検討も行った。AA (6 例) AL (9 例) の大別において, K 法と ABC 法による AA 蛋白の結果が一致した。K 法では切片がはがれやすくセロイジン被膜を使用した。他の処理法でも処理できた。K 法後のアミロイド染色は Alkaline congo red に限られ, Dylon 以下では無効であった。5 種のアミロイド染色においては顕著な染色差は認められず, 皮膚例にのみ DFS が特に有効であった。ただアミロイド弱陽性例の分類の判定

が困難なものや非 AA 蛋白で AL 以外の蛋白のものに関しては更に検討すべき今後の課題である。なお、全身性「ア」症例については、各臓器の沈着アミロイド蛋白の種類は同一であった。

座長 渡辺駿七郎 (国立金沢病院)

7. 甲状腺 Pseudolymphoma の 1 例

○松原藤継, 水上勇治, 寺畑信太郎
橋本琢磨 (金沢大検査部)
宮崎為夫 (同 耳鼻科)

患者は 57 才, 女性, 右甲状腺に $2.0 \times 1.5 \times 1.5$ cm 大の境界明瞭な結節を認める。結節は組織学的にリンパ組織の増生より成り, 胚中心を有する多数のリンパ濾胞とその間に成熟 plasma cell の集簇が認められた。個々のリンパ濾胞は正常リンパ節と同様な胚中心と成熟したリンパ球より成る mantle zone より構成され, 濾胞状リンパ腫を示唆する異型性, 核分裂の増加は認めない。Hassall 小体は認めず, 又免疫染色にて, OKT-10 あるいは OKT-6 陽性細胞は全体の 10% 以下であった。周囲甲状腺に慢性甲状腺炎の変化は認めず, 血中抗甲状腺抗体は陰性であった。これらの所見より本例は Pseudolymphoma と診断された。甲状腺における Pseudolymphoma の報告例は未だなく, 本例が初めての報告例と考えられる。

8. 破骨様巨細胞を伴う乳癌の 2 例

○川畑圭子, 川中 剛, 富田小夜子
尾崎 聡, 南比呂志, 渡辺駿七郎
(国立金沢病院研究検査科)
津田宏信 (同 外科)

<はじめに>破骨様巨細胞を伴う乳癌は稀である。この巨細胞の起源はなお決着を見ないが, 我々が経験した 2 症例を使って酵素抗体法により若干の検討を試みた。<症例 1>35 才, 女性, 乳腺穿刺吸引細胞診では癌細胞に混じて多数の巨細胞を認めたが 22 日後の Amputation 材料では全く巨細胞を認めなかった。組織型は 2 cm 大の硬癌, <症例 2>50 才, 女性, 生検では破骨様巨細胞を多数認める約 2 cm 大の乳頭腺管癌。Amputation では腫瘍の残存なし。

<検討・結果>この 2 症例を ABC 法にて, 抗 EMA, 抗 Keratin, 抗 Vimentin の染色を実施。2 症例とも癌細胞は EMA (+), Keratin (+), Vimentin (+) ~ (-), 巨細胞は EMA (-), Keratin (-), Vimentin (+) の結果を得た。対照として巨細胞を含まない通常型浸潤癌 8 例, 非浸潤癌 2 例では癌細胞はすべて EMA (+), Keratin (+), Vimentin (-) だった。

<まとめ>染色結果より巨細胞は癌細胞の性格が一部変わったが故の結果と思われた。また Amputation で巨細胞が消えた事実より組織球由来と思われた。

生 化 学

座長 谷島清郎 (金沢大医療短大)

9. RPHA 法を用いた便潜血検査法 イムディアー HemSp の使用経験について

○金山泰子, 水野光子, 大島恵子
佐々木玲江, 三浦隆史, 寺岡弘平
寺畑喜朔 (金沢医大中検)

最近, ヒトヘモグロビンと特異的に反応する免疫学的な便潜血検査法が各種開発され, 大腸癌のマスクリーニング法として注目されている。今回, 我々は RPHA 法を用いた方法の一つである富士レビオ社の「イムディアー HemSp」を入手する機会を得, 従来より使用しているシオノギ社の「便潜血スライド」(ペルオキシダーゼ様活性を利用した生化学的方法) との比較検討を行ったので報告する。

便潜血スライドは簡便, 迅速, 廉価という長所はあるものの, 食餌や薬剤の影響を受けやすいため特異性に問題があるが, イムディアー HemSp は基本的な使用法を厳守すれば感度, 特異性にすぐれた下部消化管出血の検出に有用と思われる。又, 上部消化管出血については, ヘモグロビンが排泄されるまでに時間がかかり変性起るためか, 原因は定かでないが若干, 陽性率が低いという結論を得た。

10. Bilirubin displacer について

○油野友二, 山本 豊, 中村英夫
(金沢赤十字病院中央検査部)

新生児黄疸管理においてアルブミン (ALB) とビリルビン (BR) に相互作用について考えることは重要なことであり, 特に Bilirubin displacer となり得る薬剤の影響については注意が必要であるとされている。今回我々は Bilirubin oxidase を使用した Unbound bilirubin 測定方法を利用し, ALB の BR 結合部位における薬剤の結合定数 (K_D) の測定について検討した。【結果】Bilirubin oxidase 1U/ml にて UB 値を算出し Brodersen の方法により K_D を求めた。Indomethacin $1.37 \times 10^4 \text{ M}^{-1}$, Na salicylate $2.30 \times 10^3 \text{ M}^{-1}$, Amynophyllin $1.44 \times 10^3 \text{ M}^{-1}$, LMOX $8.04 \times 10^2 \text{ M}^{-1}$, CTX $3.94 \times 10^3 \text{ M}^{-1}$, Doxapram $3.31 \times 10^2 \text{ M}^{-1}$ であり LMOX を除く各薬剤の K_D の傾向は船戸らの結果と一致した。【結語】新生児に使用される薬剤については ALB-BR 相互作用に及ぼす影響について検討すべきである。

座長 奥村次郎 (金沢大)

11. メトヘモグロビン血症の HPLC による簡易鑑別法
○馬渡一浩, 長井雅子, 谷島清郎
(金沢大医短)

松川 茂, 米山良昌 (金沢大医化学)

遺伝性メト Hb 血症にはメト Hb 還元酵素の欠損症と Hb に異常のある Hb M 症の 2 つのタイプが知られている。いずれも酸化型 Hb の含量が高く、血液は赤褐色を呈する。しかし、症状の軽度なものでは肉眼では直ちに判定しがたく、両者の区別は容易でないので、迅速で簡便かつ正確な分析法が必要である。そこで今回、我々は患者赤血球溶血液を HPLC で分析することによって、2 つのタイプを鑑別するための方法を確立したので報告する。陽イオン交換カラムを用い、塩濃度勾配法により Hb 分子種を分離・溶出したところ、メト Hb 還元酵素欠損症の患者溶血液では正常人に比べて、メト Hb 及び Hb の部分酸化された分子種の著しい増加がみられた。一方、Hb M 症の患者溶血液では、正常 Hb A の後に Hb M のピークが検出でき、かつ、溶出位置は Hb M の種類により異っていた。以上の結果から HPLC による患者溶血液の分析法は遺伝性メト Hb 血症の鑑別に非常に有用であると考えられる。

12. 緊急検査に対応可能な臨床検査コンピュータシステムの設計と導入について

○井村敏雄, 長谷川俊雄, 黒田満彦
(福井医科大学検査部)

夜間、休日の当直を含む緊急検査業務に対応可能な臨床検査コンピュータシステムを設計、導入した。住友電工製 USTATION (2MB) を中心に、無停電電源装置、フロッピーディスク (1MB)、固定ディスク (80MB)、CRT (2台)、プリンター (3台)、緊急検査用自動分析装置 (4台) から構成されている。

ソフトウェアは言語に U-MUMPS を使用し、ワークシート作成、報告書作成、精度管理処理など緊急性を要する処理に対応できるよう、プログラムを追加、改良した。また、デフォルト機能 (自動セット・内容表示、自動表示・ワンタッチ入力、自動セット・ワンタッチ表示・ワンタッチ入力・自動表示・自動セット) の強化により、端末操作の迅速化を計り、また現検査部ホストコンピュータとのオンラインにより、日常検査データの夜間の問い合わせへの対応を可能にした。さらにこれまでの日常検査処理の機能も備えており、日常の臨床検査システムとしても利用できる。

座長 橋本琢磨 (金沢大)

13. 本院における妊婦 ATLA 抗体スクリーニングの現状

○大野千賀, 二木敏彦, 油野友二
山本 豊, 中村英夫
(金沢赤十字病院中央検査部)

〔目的〕成人 T 細胞白血病ウイルス (ATLV) の母子間垂直感染を予防するため、妊婦の ATLA 抗体スクリーニングを行なった。

〔対象・方法〕妊婦と手術患者を対象に富士レピオの PA 法を実施し、16 倍以上のものを陽性とした。

〔結果〕PA 法陽性者は 1300 名中 7 名で、陽性率は 0.5% であった。この 7 名中 3 名が WB 法陽性で、ATLA 抗体陽性と判定した。

〔考察〕このスクリーニングにおける PA 法陽性例では IF 法と不一致で、WB 法においても一部に再現性における問題点が指摘される。検出された抗体が IgM 型であったことも、今後 IgG 型に移行するのか、それとも IgM 型のままなのか (初期感染との関係?)。WB 法の信頼性が 100% であるかどうか。患者の立場から false positive をさけるためにも first screening で (+) になったものは second screening を行なった方がよいと思う。今後も継続的にスクリーニングを行なって、さらに検討を加えていきたいと考える。

14. ゼラチン粒子凝集反応を用いた抗 HIV 抗体の検討

○橋本儀一, 杉本英弘, 森河 浄
黒田満彦 (福井医大検査部)

ゼラチン粒子凝集法 (PA 法) を応用した抗 HIV 抗体測定のための基礎的検討及び、本法による市販精度管理血清中の抗 HIV 抗体測定を行い、次の結果を得た。① 同時再現性 (N=8) は一致率 100% で変動は認めなかった。② 試薬の 4℃ 保存における安定性は、30 日まで確認できた。③ 術者間における差は認めなかった。④ 管理血清中の抗 HIV 抗体は、輸入製品で約 4 割、国産製品で約 3 割が陽性を示した。⑤ 陽性管理血清の PA 法による抗体価の分布は 32~4096 倍に及び、約 2 割が 1024 倍以上の高力価を示した。以上より、PA 法による抗 HIV 抗体の測定は、操作が簡便、再現性、試薬の保存性も優れているなど、日常検査に有用な方法であると考えられる。また、市販精度管理血清については、感染性を有する製品が今後混入する可能性も十分に考えられ、その取り扱いには十分な注意が必要と思われた。

15. 石川県医師会臨床検査精度管理にみる輸血検査の

精度と問題点

○酒向良博（石川県立中央病院中央検査部）

高村利治，松原藤継（金沢大中央検査部）

荒井克雄，小西奎子（国立金沢病院研究検査科）

昭和56年より開始した石川県医師会精度管理調査の中で実施した過去6回の輸血サーベイを分析したところ下記の事が判った。1. ABO式血液型では正常な血液型は例年ほぼ100%近い正解率であるが，亜型では1/4～半数弱の施設が誤判定であった。この原因は裏試験未検査によるものが大部分であるが，年々裏試験併用施設は増加している。2. Rh(D)式ではサーベイ初期D⁺の確認試験を実施していない施設が若干あったが，昨年のサーベイでは参加全施設が実施していると考えられた。3. 交叉適合試験では抗体価の高い検体では約85%の正解率に対し，抗体価の低い検体では40%前後の低い正解率に過ぎないことがわかった。また免疫血液学用遠心機の保有施設と非保有施設では，保有施設の正確率の高いことが判った。さらに交叉適合試験の組合せでは1～2法実地施設より3～4法実地施設の正確率が高く，最近この3～4法実地施設が増加してきた。

座長 高柳尹立（富山市民病院）

16. 風疹の流行時にみる Rubella-IgM 抗体測定値の評価

○中川志津子，小西奎子，松田寿俊

（国立金沢病院研究検査科）

松山 毅（同 産婦人科）

風疹には催奇性があり，しかも不顕性感染が多い為，妊婦では感染時期を特定する必要がある。S. 58年に本学会等で発表以来，我々はProtein A処理による風疹IgM抗体測定を日常検査に利用して来た。今春の風疹流行を機会に風疹IgM抗体測定の再検討を行った。

方法：Protein A吸着後の風疹HI価測定とEIA法（ダイナボット）による風疹IgM抗体測定

結果：① Protein A処理によるIgM-HI価とEIA-IgMは病1週間にピークを持ち，約8週間検出可能② 発症1～3日は，Protein A-IgM ⊕・EIA ⊖の症例が多い。③ Protein AのIgG吸着率は，10倍以上の希釈血清で97±3%で約3%の吸着残余率④ Protein A処理64 HI価以上の16例全例・32 HI価18例中17例・16 HI価18例中9例・8 HI価15例中8例に，EIA ⊕ 46例中45例に感染あり。⑤ 感染あり50例中の5例はEIA ⊖。Protein A-HI価はEIAより早期にIgM抗体を検出できるが，16 HI価以下では未吸着のIgGである可能性があり，経過観察を必要とする。

17. Graves病治療中における TBII（抗 TSH 受容体抗体），TSI（刺激性抗体）および TSBAb（抑制性抗体）の推移

— 2年間の経過観察 —

○橋本琢磨，水上勇治，松原藤継

（金沢大臨床検査医学）

村本信吾（公立能登総合病院内科）

20例のhyperthyroid Graves病（I群）と22例の治療開始後2年以上経過した寛解Graves病（II群）において，TBIIとTSIさらにFT₃，FT₄との相関を検討した。TSBAbの陽性のhypothyroid Graves病の1例を呈示した。hyperthyroid Graves病ではTBII（y）とTSI（x）に $y=0.024x+20.6$ （ $r=0.742$ ， $p<0.001$ ）の正相関がみられたが寛解Graves病では相関はなかった。TBIIとFT₃，FT₄もI群では正相関があったがII群ではなかった。44歳のhypothyroidの患者でTBII 93.3% TSI陰性 TSBAbは94%であった。

細菌

座長 藤田信一（金沢大）

18. 臨床材料から分離された G 群溶レン菌について

○山形美津枝，山室雅義，浦田恵美子

志浦美徳，高柳尹立

（富山市民病院中央研究検査部）

溶レン菌は臨床材料から高頻度に分離される菌で，そのほとんどがA，B，C，Gの4群に属し，中でもA，B両群が大部分を占めている。近年G群の分離が増加傾向にあるように思い，1980年1月から1986年12月までの7年間の溶レン菌分離状況を調べるとともに，G群溶レン菌について臨床細菌学的検索を行った。

7年間の分離総数は407株で，A群75.2%，B群12.8%，C群2.0%，G群9.3%，群不明が0.7%であった。G群溶レン菌38株の臨床材料をみると，呼吸器由来21株，膿・分泌物由来14株，尿由来3株であった。また臨床的背景をみると，女性より男性からの分離が多く，平均年齢は50才代であった。呼吸器材料では，脳挫傷や脳血管障害などの長期入院患者から多く分離され，他の臨床材料についてもなんらかの基礎疾患を認めた。またG群溶レン菌単独ではなく，複合菌の一部として分離される場合が多いが，抵抗減弱個体に対するの病原的意義が示唆された。

19. 当院で分離された多剤耐性ブドウ球菌について

○久保克美，山下政宣，黒田満彦

（福井医大検査部）

我々は，本学附属病院開院時からのS. aureusの分離状況と薬剤感受性成績を集計し，さらに臨床由来株

について2, 3の検討を加えた。その結果, *S. aureus*の年次別検出頻度には明らかな変化は認められなかったが, それらに占めるCET耐性*S. aureus*の分離頻度は年々増加傾向を示し, 1986年には24.4%となり, ほぼ諸家の報告に一致する成績となった。材料別検出頻度をみると膿・喀痰・尿・血液・その他の順でCET耐性*S. aureus*が分離されていた。35株の臨床由来株を用いてMIC値を測定したところ, 全例DMPPC, CETに32 µg/ml以上を示したことからMRSAと同定した。種々の薬剤のMIC分布からVCM, MINO, NFLXの抗菌力が優れ, MRSA感染症に有効な薬剤と考えられた。臨床由来株35株中6株はペニシリナーゼ非産生株であり, これはPBPの変化によって耐性化したものと考えられた。MRSAは院内感染や難治感染の原因になる可能性が高いことから, 今後の本菌の動向に注目していく必要がある。

20. SBE症例より分離した*Actinobacillus actinomycetemcomitans*について

○水落富士代, 柴田淳子(城端厚生病院検査部)
谷内江昭宏(同 内科)
寺中正昭(同 外科)
池端 隆(金沢医大中央臨床検査部)
早瀬 満(同 呼吸器内科)

患者11才, M, 主訴発熱, 頭痛, 吐気, ファロー四徴症根治術の既往歴がある。

10月17日当院小児科受診。初診時検査にて炎症所見を認めた。発熱が続くためSBEが疑われ, 血液培養を繰り返し施行した。

11月4日カルチャーボットの管壁に顆粒状の微小な白色コロニーの付着が認められ, G(−)球杆菌を分離した。分離菌はCO₂培養で良好な発育を示し, XV因子はともに要求せずカタラーゼ・オキシダーゼ陽性, インドール, ウレアーゼ陰性。糖分解ではグルコース・マルトース・マンノース・マンニット・フルクトース陽性, その他の糖は陰性。以上の性状より*A. actinomycetemcomitans*と同定し, 同菌によるSBEと診断され抗生剤の投与で臨床症状は改善した。

*A. actinomycetemcomitans*による感染例の報告は少ないが, 歯根周囲に常在する細菌であり, 起炎菌不明のSBE例では本菌にも充分な注意を払う必要がある。

座長 早瀬 満(金沢医大)

21. 血清中アスペルギルス抗原検出に関する基礎的・臨床的検討

○藤田信一, 松原藤繼(金沢大検査部)

侵襲性アスペルギルス症の生前診断はきわめて困難である。本疾患の免疫血清学的診断法の確立を目的として, 血清中アスペルギルス抗原の検出をビオチン・ストレプトアビジンを用いた酵素免疫法により試みた。抗血清は*Aspergillus fumigatus*の分生子をウサギ耳静脈内に投与して得た。この抗血清より調整したIgG 5 mgとビオチン0.5 mgを室温で1時間反応させ, ビオチン結合抗体を作製した。本法により健康者プール血清に添加した抗原を炭水化物濃度で1 ng/mlまで検出可能であった。剖検にて確認された侵襲性アスペルギルス症は11例(39検体)で, このうち9例(18検体)から1 ng/ml以上の抗原が検出された。一方, アスペルギルス症を合併していない入院患者33名と, 健康者20名ではすべて抗原陰性であった。本法の測定感度は82%, 特異性は100%であった。

22. 細菌業務のシステム化

○松岡隆子, 吉田知孝, 伊藤嘉浩
尾角信夫, 藤田信一, 松原藤繼
(金沢大検査部)

(目的) 当検査部細菌検査室において昭和61年12月よりパーソナルコンピュータを用いて細菌業務の簡素化, 検査成績の統計処理, 臨床側への報告の迅速化等を目的にシステム化したので報告する。

(システム機器構成) N5200/05 mk II 2セットで一般細菌, 抗酸菌を独立させ用いた。

(各種コードの設定) データを能率よく簡単, 正確に入力するため科・病棟, 検査材料, 菌種, 薬剤, 結果値, コメント等をアルファベットと数字であらわした。

(検査業務の流れ) システム運用のための作業は1) 依頼入力/修正, 2) ワークシート出力, 3) 結果入力/修正, 4) 各種帳票出力, 5) 検査結果送信, 6) 統計処理である。

(まとめ) 細菌業務のシステム化により事務作業の能率化, 検査結果送信により臨床側への報告の迅速化, そして各種統計表の出力により病原菌の変遷, 耐性化の動向等を把握する資料を臨床に提出するつもりである。

23. AZTに対する臨床分離株の感受性分布

○石倉誠司, 北川浩一, 竹内富美恵
小島由加理, 塩谷勝夫(福井県立病院検査室)
山崎義亀与(同 内科)

当病院の感染症患者より分離された原因菌に対するモノバクタム系抗生剤AZTの検査材料別感受性と, 他の薬剤との比較を行った。

(方法) 各種抗菌剤ディスクを用いた平板拡散法で,

阻止円の大きさから (－)(＋)(＋)(＋) と判定。

[比較薬剤] CEZ, CMZ, CZX, CTX, CMX, LMOX, PIPC, AMK.

[結果] (高度感受性の割合を記載)

E. coli: AZT, LMOX, CTX 98%

K. pneumoniae: AZT 100%, CTX 98%, CMX 97%, CZX 91%, LMOX 89%

S. marcescens: AZT 83%, CMX 64%, CZX 62%, CTX 60%, LMOX 32%

C. freundii: AZT 69%, LMOX 63%, CTX 63%, AMK 59%, CMX 55%

P. aeruginosa: AZT 77%, AMK 42%, PIPC 35%, CMX 33%, CTX 20%

Proteus, Enterobacter にも AZT は高度感受性であり、検査材料別には大差がなかった。又、 β -lactamase 産生菌にも極めて安定であった。

教育講演

司会 小西健一 (富山医薬大)

二十世紀後半初頭におけるわが国の臨床検査について

金沢医科大学教授 寺畑喜朔

第15会場 麻酔科分科会

第41回 日本麻酔学会北陸地方会

座長 富山医科薬科大学手術部 佐藤根敏彦

1. Minitracheotomy の紹介

(Minitrach II の使用経験 3例)

○ 釈永清志, 桐山昌子, 中西拓郎
(富山市民病院麻酔科)

中村琢哉, 増山 茂, 天谷信二郎
手井喜久男 (同 整形外科)
石田陽一 (同 内科)

2. 無停電電源は停電する

○ 浦野博秀, 林 昌弘 (福井医大手術部)

3. コンピュータ化患者管理システム

(K-PMS) の使用経験

○ 松田 修, 森 秀麿 (金医大麻酔科)
知久田博, 洞庭政幸 (同 手術部)

4. Preliminary study on the role of oriental tongue diagnosis in patients suffering from essential hypertension

○ Shay Pintov, 伊藤祐輔
(富山医薬大麻酔科)

座長 福井医科大学麻酔科 高橋光太郎

5. ウサギ洞結節細胞における早期後脱分極 (EADS)

○ 川口秀二, 松田知之, 松田 修
青野 允, 森 秀麿 (金医大麻酔科)

6. モルモットを用いた低酸素症モデルにおける ABR の変化と脳組織所見

○ 中村耕一郎, 森 秀麿, 池田一雄
(金医大麻酔科)
佐藤喜一 (同 耳鼻咽喉科)

7. 乳酸代謝検討のための臓器中 L-¹⁴C-乳酸と D-¹⁴C-乳酸の放射性活性測定法について

○ 山本昌子, 久世照五, 伊藤祐輔
(富山医薬大麻酔科)
宮原龍郎, 横田育良, 狐塚 寛
(同 薬学部臨床分析)

座長 福井医科大学手術部 浦野博秀

8. 慢性腎不全患者の麻酔におけるリラクソグラフの有用性について

○ 佐々木理華, 池田一雄, 青野 允
森 秀麿 (金医大麻酔科)

9. 術後第 XIII 因子減少により再出血をおこした 1 例

○ 高橋麗子, 佐伯善機 (厚生連高岡病院麻酔科)
生垣 正 (市立砺波総合病院麻酔科)
村上誠一 (金大麻酔科)

10. 重症筋無力症の麻酔経験

○ 畑島 淳, 松田 修, 池田一雄
森 秀麿, 青野允 (金医大麻酔科)

11. 新生児巨大肺嚢胞に対する左肺切除術の麻酔管理

○ 水橋久美, 広田弘毅, 樋口昭子
伊藤祐輔 (富山医薬大麻酔科)

12. Peters' 奇型の麻酔管理

○ 林 睦子, 樋口昭子, 山崎光章
(富山医薬大麻酔科)
佐藤根敏彦 (同 手術部)

座長 金沢医科大学麻酔科 青野 允

13. エホバの証人に対する術中 Fluorol-DA® の使用経験

○ 藤林哲男, 原田 純, 中嶋一雄
八木裕一郎, 坪田恭子, 後藤幸生
(福井医大麻酔科)

14. 麻酔導入後ベレーシングが必要となった洞機能不全症候群の麻酔経験

○ 杉本祐司, 東藤義公, 村上誠一
(金大麻酔科)

15. 麻酔覚醒時に急性心筋梗塞をおこした 1 例

○ 井上智子, 石田 浩, 山本 健
村上誠一 (金大麻酔科)

16. サクシニルコリンによる過敏症の 1 例

- 乾 早智子, 浜谷和雄, 遠山芳子
(石川県立中央病院麻酔科)

座長 金沢大学医学部救急部 相沢芳樹

17. ICUにおけるダントロレンの使用経験

- 川瀬英代, 高橋光太郎, 八木裕一郎
麻生佳津子, 高波千栄美, 高倉 康
後藤幸生 (福井医大麻酔科)

18. 超音波ネブライザによる薬物安定性の検討 (第1報)

- 高波千栄美, 麻生佳津子, 丹羽真理子
後藤幸生 (福井医大麻酔科)

19. 中心静脈内へのエレントール誤注により引き起こされたseptic shockの1症例

- 中田克治, 田辺 毅, 黒田えり子
莊司 勲, 米沢郁雄
(福井赤十字病院集中治療室)
森 秀麿 (金医大麻酔科)

20. 多臓器不全をきたした重症電撃傷の治療経験

- 桐山昌子, 沢永清志, 中西拓郎
(富山市民病院麻酔科)
森川精二, 増山 茂, 天谷信二郎
手井喜久男 (同 整形外科)
石田陽一 (同 内科)
太田真人 (同 形成外科)

21. ICUにおけるCAVHの臨床経験3例

(間質性肺炎, 重症電撃傷, 重症熱傷)

- 沢永清志, 桐山昌子, 中西拓郎
(富山市民病院麻酔科)
石田陽一 (同 内科)

座長 金沢大学医学部麻酔科 小林 勉

22. 子宮全摘術後鎮痛における硬膜外ブルトルファン投与の効果について

- 大桑正名, 佐々木理華, 柳沢 衛
青野 允, 森 秀麿 (金医大麻酔科)

23. 帯状疱疹に対する神経ブロックとAro-A (ピダラビン) の併用療法

(第2報)

- 福島真理, 松田富雄, 橘 俊孝
青野 允, 森 秀麿 (金医大麻酔科)
阿部 浩 (恵寿総合病院麻酔科)

24. 持続腋窩部腕神経叢ブロック

—神経血管鞘内の薬剤の拡がりに影響する因子の検討 第3報—

- 山本 健, 野村俊之, 村上誠一
(金大麻酔科)

25. 硬膜外に投与したモルヒネおよびブプレノルフィン の自律神経系におよぼす影響

- 樋口昭子, 水橋久美, 伊藤祐輔
(富山医薬大麻酔科)

第16会場 泌尿器科会

第337回 日済泌尿器科学会北陸地方会

症例報告1

座長 神田静人 (富山市民)

1. 後腹膜線維症の1例

- 平田昭夫, 西野昭夫, 内藤克輔
久住治男 (金大)

2. 後腹膜脂肪肉腫の1例

- 三輪吉司, 中村直博, 鈴木裕司
秋野裕信, 蟹本雄右, 清水保夫
(福井医大)

3. 慢性腎不全患者に合併した腎腫瘍の6例

- 中嶋孝夫, 宮崎公臣, 平田昭夫
布施春樹, 藤田幸雄 (藤田病院)
村本弘昭, 宮崎良一 (同 内科)

4. TAEを契機として発症した腎細胞癌腫瘍内感染 の1例

- 河原 優, 和田 修, 藤田知洋
岡野 学, 磯松幸成, 秋野裕信
村中幸二, 清水保夫 (福井医大)
中村康孝 (中村病院)

症例報告2

座長 宮城徹三郎 (石川県立中央)

5. 腎盂扁平上皮癌の1例

- 奥村昌央, 河野孝史, 笹川五十次
風間泰蔵, 秋谷 徹, 中田瑛浩
片山 喬 (富山医薬大)

6. 腎盂尿管白板症の1例

- 加藤正博, 神田静人 (富山市民)

7. 尿管エンドメトリオージスの1例

- 萩中隆博, 酒井 晃 (富山赤十字)
鳥取孝成 (同 産婦人科)

- 野田 誠, 北川正信 (富山医薬大第1病理)
池田肇信 (池田医院)

8. 溶解に成功した尿酸結石の2例

- 田近栄司, 中村武夫 (富山県立中央)

9. Ectopic ureteroceleの1例

- 熊木 修, 田尻伸也, 竹前克朗
鈴木都美雄, 石田武之 (長野赤十字)
上条岳彦 (同 小児科)

症例報告3

座長 中村武夫 (富山県立中央)

10. ESWLの治療経験

—治療に難渋した症例—

○池田龍介, 江原 孝 (浅ノ川総合)
下 在和, 白岩紀久男, 鈴木孝治
津川龍三 (金沢医大)

11. 腎盂外溢流をきたした尿管に対するESWLの治療経験

○馬込 敦, 川村研二, 山口智正
谷口利憲, 下 在和, 津川龍三
(金沢医大)

12. 膀胱平滑筋肉腫の1例

○高島三洋, 横山 修, 小島 明
(砺波総合)
小杉光世 (同 外科)
安念有声 (同 病理)
荒川文敬, 角田清志 (同 放射線科)
津田達雄 (津田産婦人科)

13. 多彩な経過をとる子宮癌術後症例

○島田宏一郎, 小林徹治 (福井県立)
山崎 信 (同 外科)

14. 結石が介在した膀胱腫瘍の1例

○布施春樹, 宮崎公臣, 中嶋孝夫
藤田幸雄 (藤田病院)

症例報告 4

座長 島田宏一郎 (福井県立)

15. 睾丸回転症の4例

○村山和夫, 勝見哲郎 (国立金沢)

16. 副睾丸部 adenomatoid tumor の1例

○押野谷幸之輔, 江川雅之, 小松和人
長野賢一, 三崎俊光, 久住治男
(金大)

17. adenomatoid tumor の3例 (精巣上体, 陰囊内)

○坂井健彦, 寺田為義, 古田秀勝
里見定信, 秋谷 徹, 中田瑛浩
片山 喬 (富山医薬大)

18. 前立腺周囲に転移巣を認めた陰茎癌の1例

○南後 修, 中嶋和喜, 山口一洋
大川光央, 久住治男 (金大)
上木 修, 庄田良中 (国保輪島)

19. 特発性陰嚢石灰沈着症の1例

○川口正一, 平野章治, 美川郁夫
(厚生連高岡)
小田島肅夫 (金沢医大第1病理)

臨床的研究

座長 鈴木孝治 (金沢医大)

20. 利尿剤投与がピペラシリン動態に与える影響

○秋谷 徹, 酒本 護, 賈 金銘
中田瑛浩, 片山 喬 (富山医薬大)

21. 褐色細胞腫のカテコールアミン代謝

○中田 瑛浩, 小池 宏, 古田秀勝
片山 喬 (富山医薬大)

特別講演

座長 片山 喬 (富山医薬大)

経尿道的上部尿路用ファイバースコープ

東京大学 阿曾佳郎 教授

第17会場 皮膚科分科会

日本皮膚科学会北陸地方会第324回例会

演 題

1. 野菜による接触皮膚炎

○村田久仁男, 稲沖 真 (金沢大)

2. 当院におけるアトピー性皮膚炎の実態 (第2報)

○大槻典男 (舞鶴共済)

3. Hailey-Hailey 病の1例

○八町祐宏, 高石公子, 石田久哉

上田恵一 (福井医大)

4. 先天性表皮水疱症 (接合部型) の2例

○八田尚人, 光戸 勇 (福井県立)

足立壮一 (同 小児科)

谷口 滋 (金沢大)

5. Verruciform Xanthoma

○斉藤明宏 (富山医薬大)

6. 小児の線状強皮症3例

○早川幸紀, 富中和夫, 藤田幸雄

(藤田病院)

7. Diabetic scleredema

○服部邦之, 神永時雄 (公立加賀中央)

8. 成人 Still 病

○谷口章, 谷口滋 (金沢大)

此下忠志, 平井圭彦 (同 第2内科)

9. 側頭動脈炎

○山本善明, 福井米正 (黒部市民)

安田厚子, 寺田康人 (同 内科)

車谷 宏 (金沢大第2病理)

10. 外用PUVA療法が奏効した急性痘瘡状苔癬状枇糠疹

○坂井秀彰, 谷口 章 (金沢大)

11. Parapsoriasis en plaque の1例

○今井敏雄, 松本僚一 (富山市民)

12. 禿髪性毛包炎の1例

○清 佳浩, 西尾賢昭 (金沢医大)

13. 壊疽性丘疹状結核疹の1例

○中島智子, 高石公子, 上田恵一
(福井医大)

14. ケルスス禿瘡2例

○熊谷武夫 (高岡市民)

島田由香理, 久保勝彦 (金沢大)
谷口 馨 (高岡市)

15. 小児の顔面に生じたスプロトリコーシス

能川昭夫, 坂井秀彰 (金沢大)
荒井邦夫 (七尾市)

16. 伝染性単核症: 蝶形紅斑様皮疹を主皮膚病変とした2例

○田中武司, 大島茂人 (厚生連高岡)
川東正範, 亀谷富夫, 滝本弘明
(同 内科)

長谷田泰男 (同 形成外科)

17. 富山県立中央病院皮膚科における帯状疱疹の統計

○野村佳弘, 鍛冶友昭 (富山県立中央)

18. 結節性裂毛の1例

○筒井清広, 安井裕子, 川島愛雄
(石川県立中央)

19. 外傷により生じた皮膚剝離の植皮例

○鈴木裕至, 青山文代, 中島智子
上田恵一 (福井医大)

20. Glomus tumor

○石倉多美子 (公立石川中央)
上田善道 (金沢大第1病理)

21. 母指に発生した腱鞘巨細胞腫の1例

○西尾賢昭, 清 佳浩, 井本敏弘
(金沢医大)

北山吉明, 白石正憲 (同 形成外科)

22. 骨形成を伴った脂漏性角化症

松井千尋 (富山医薬大)

23. 斑状皰疹型基底細胞上皮腫

○福井米正, 山本善明 (黒部市民)
車谷 宏 (金沢大第2病理)

24. Malignant proliferating trichilemmal cyst の1例

○工藤比等志, 野々垣涼子, 米沢郁雄
(福井赤十字)
細川靖治 (福井市)

25. 汗器官癌

○神永時雄 (富山赤十字)

26. 悪性黒色腫-口腔原発

○小林博人, 武田行正, 下居佳代子
(金沢医大)

佐藤喜一 (同 耳鼻咽喉科)

27. 転移性皮膚癌の1例

○神永紀子 (金沢通信)
石野千津子 (同 内科)
村 俊成 (同 外科)

第18会場 眼科分科会

一般演題

座長 多田秀一

1. 上越総合病院外来患者における結膜嚢からの検出菌の検討

○尾崎真由美 (富山医薬大)

2. 電気分解治療が有効であった顆粒状角膜変性症の1例

○武村秀明 (宇出津病院)
山村敏明 (金沢医大)

3. フィブロンекチンの使用経験

○望月清文, 藤井 茂, 大田妙子
山下陽子, 牛村 繁, 望月周子
島崎真人 (金沢大)

打和壽子, 古瀬 裕 (金沢大薬学部)

4. 結膜下注射した薬物の涙液中濃度変化

○山田成明, 開 繁義, 石田俊郎
中村泰久 (富山医薬大)

座長 原 巖

5. Terson 症候群の治療経験

○田畑 晃, 石田俊郎, 窪田靖夫
(富山医薬大)

6. 成人の流行性耳下膜炎の経過中に発症したぶどう膜炎

○中沢益枝 (福井病院)
高橋信夫 (金沢医大)

7. 前増殖型糖尿病性網膜症にたいする光凝固-黄斑部病変の推移について-

○小嶋一晃, 松原広樹, 清水葉子
石黒裕之 (福井医大)

8. 褐色白内障レンズの褐色物質の分光学的同定

○友田華夫, 米山良昌 (金沢大生化学第1)
河崎一夫, 米村大蔵 (金沢大)

座長 青木辰夫

9. 後房レンズ眼に見られた眼外傷の3例

○升田義次 (富山市)
堀ヤエ子 (富山赤十字病院)

10. 白内障術後, 術眼に初めて発見された眼疾患についての検討

○谷口康子, 越生 晶, 浅井源之
宮谷寿史 (厚生連高岡病院)

11. 眼窩内壁-下壁陥没骨折の1例

○狩野俊哉, 山本文昭, 早見宏之
中村泰久 (富山医薬大)

12. 眼窩筋炎の1症例

○狩野宏成, 狩野晴子 (北茨城市立病院)

第 19 会場 臨床口腔外科分科会

第 7 回 臨床口腔外科分科会

一般演題

座長 山本康一（富山医薬大）

1. 頬部に発生した脂肪腫の 1 例
○寺島龍一，勝山 豪，梶村悦朗
岩井正行，古田 勲，吉田季彦
河合宏一（富山医薬大）
2. 上顎洞に発生した MFH の 1 治験例
○岡部孝一，加藤隆三，藤元栄輔
中川清昌，玉井健三（金沢大）
3. 下顎歯槽粘膜にみられた Verruciform
xanthoma の 1 症例
○西川 均，伊藤俊祐，人見権次郎
石井保雄（福井医大）
座長 人見権次郎（福井医大）
4. 歯性上顎洞炎の CT 像
○林 解平，伊藤俊祐，西川 均
印牧唐祐，新家信行，人見権次郎
石井保雄（福井医大）
5. ガマ腫の 1 症例とその MRI 画像
○竹田慶子，高木嘉子，中村 哲
船本長一朗（金沢医大）
6. 唾石症を疑った油性造影剤の長期残留の 1 症例
○加藤隆三，中川清昌，玉井健三（金沢大）
座長 中川清昌
7. 過去 5 年間に当科救急外来を受診した外傷患者の
統計的観察
○押尾 武，野尻孝司，北登代志
中川清昌，玉井健三（金沢大）
8. 過去 5 年間の当科入院患者の臨床統計的観察
○中新敏彦，藤元栄輔，野尻孝司
北登代志，織田武吉，岡部孝一
岩井正博，馬場利人，松原完也
加藤隆三，押尾 武，仲井雄一
室木俊美，中川清昌，玉井健三（金沢大）
9. 当科における入院患者の統計的観察
○宮田 勝，坂下英明，荒川昌子
林 守源（石川県中）
座長 船本長一朗（金沢医大）
10. 下顎小臼歯部に発生したセメント質腫の 1 例
○佐渡忠司，永森 司，大木淳一
岩井正行，古田 勲，小林 信
沖田 進，水分寿雄（富山医薬大）
11. 第一大臼歯を含む欠如状態を示した先天性多数歯
欠如症例
○西田明彦，窪田道男，下村隆史

出村 昇，須佐美隆三（金沢医大矯正）

12. 外科的矯正が奏効した上顎前突症の 1 治験例
○澤田敏晴，梶村悦朗，児島三津男
真館藤夫，山本康一，古田 勲
岡野秀成，山田 耕（富山医薬大）

教育講演

座長 分科会会長 古田 勲

口腔領域の画像診断について

福井医科大学歯科口腔外科学教室
教授石井保雄

座長 須佐美隆三（金沢医大矯正）

13. マークカードを用いた矯正歯科患者データ管理シ
ステム
その 1. システム構成について

○下村隆史，香林正治，小熊清史
高田保之，窪田道男，西田明彦
須佐美隆三（金沢医大矯正）

14. マークカードを用いた矯正歯科患者データ管理シ
ステム

その 2. 患者動向について

○香林正治，下村隆史，小熊清史
高田保之，窪田道男，西田明彦
須佐美隆三（金沢医大矯正）

座長 塩田 覚（金沢医大）

15. 鼻腔，上顎洞におよんだ多形性腺腫の 1 例
○山内浅則，萬羽賀津雄，山本康一
古田 勲，澤本正登，山田隆寛
（富山医薬大）

16. 当科における耳下腺手術の 4 例

○坂下英明，宮田 勝，荒川昌子
林 守源（石川県中）

17. 実験的に誘発した唾液腺腫瘍の形態学的構築構造
について

○南 康英，吉田 徹，塩村 太
高沢一良，船本良一朗，塩田 覚
（金沢医大）

座長 玉井健三（金沢大）

18. 広範囲な lichen planus の LASER 療法の考察
○岩井正博，押尾 武，中川清昌
玉井健三（金沢大）

19. 陳旧性関節突起骨折の 2 例

○印牧康祐，西川 均，林 解平
新家信行，石井保雄（福井医大）

20. Au グレイン，温熱療法併用による口唇癌治療

○湯口正治，真館藤夫，岩井正行
山本康一，古田 勲，池田寿人
細川史郎，荒川昌子（富山医薬大）